

昭和二十三年

日記

五月二日（日） 雨 舎生十四名

新入舎生をかんげいの意を含めて円山に花見に行く。午後雨降る。豚汁を鱈腹たべることにだけに終わってしまったのは残念だった。

五月三日（月）新憲法発布記念日で学校休み

寄宿舎横の大木二本を切倒す、村上、村瀬、山本、坂井の四名歸舎、夜停電風強し

五月四日（火）砂糖配給になる。角田君夜歸舎、夜一室騒がし

五月五日（水）お節句 数日来の雨雲を一層して快晴、初夏を思はせる暖かさ、午後魔の踏切附近の肥料倉庫全焼す。配給の砂糖で晩はボタモチ

西日うけ 泳ぎ疲れし 幟かな

（凡平）

五月六日（木）快晴

昨日に引続き小春日和の好天気である。陽ざし一杯をうけて街路を行くと薄汗がにじむくらい。桜花爛漫、緑も美しく揃い出した。日干もぼつ※※現れ出した。舎内倦怠感なし。夕方舎前に於ける泉田、三角両選手の転廻不倒立競技は未曾有の見物であった。両選手熱戦のあまり舗装街路にまで出づ、前半にて優勢なりし泉田選手も後半戦に消耗神経遅鈍となり惜敗せり。

六号室 森田

五月七日（金）曇否晴

二、三日暖かく晴天の日がつづく、明日は仙台寮とピンポンの試合をするので、夕食後、練習盛

五月八日（土）曇前晴

朝六時起床いつもの如くアルバイト。午後六時より仙台寮に於てピンポン大会、全舎生応援、舎生連日の練習にて上達目ざましく、勇戦奮闘し、大勝を博せんと欲せしも実力や不足、且や萎縮気味にて次の如き成績にて惜敗す。

青年寄宿舎 仙台学寮

河村 6—11 牧野

5—11

山崎 9—11 増田

11—8

6—11

河瀬 2—11 高橋

7—11

平 3—11 手島

3—11  
 中川 11— 9 吉岡  
 11— 5  
 中田 3—11 門澤  
 5—11  
 飯田 11— 5 安達  
 7—11  
 10—12  
 三角 9—11 伊藤  
 8—11  
 草地 8—11 春田  
 5—11  
 村瀬 9—11 加藤  
 11— 6  
 7—11  
 坂井 1—11 島津  
 2—11

#### 河瀬記

五月九日（日）

若干名ハ、舎ノ第二農場ニ アルバイトニ行ク、他の数名ハ、ゲルアルバイトニ行ク  
 メンバーノ中ニハ “ブル” デ名ノ知ラレタ人モマヂッテキル？ 休日ヲ利用シテ、早ク  
 モ大掃除ヲシタ者モイル

本日ハ日シヨク、全部カケナイノハ齒切レガ悪イ

町ノ人ハ ゾク※※ト円山ヘ行ク

五月十日（月）晴のち曇り（塵風）

“桜の花が咲いた。人はめかしこんで酒宴をひらく”、いかにも春の気色ばんだ貌形である。人間の官能は、イクサイトメントに針指をもった **magnetic needle** である。そのア  
 トラクションも距離の二乗に逆比例するのである。視力の範囲内の桜、酒、人 その装  
 飾そんなものに心悸え造して人生に航路する人夫こそ大洋に流離ひ、暗礁に乗り上げ海  
 の藻屑と化すあはれなる人間ならずや、地磁気をかる羅針盤を持つ船すらも目的の地に  
 達着せずして、磁気のあらしに遭遇し果ては漂流し消滅死するではないか。イクサイト  
 メントに方向をとる官能的人間は見よ、我々の認知した **magnetic needle** の悲劇を、人  
 生航路をイクサイトメントで推測する磁針よりも理智の磁針をもって消えざる星を目的  
 に、勇しく船路をとる人生でありたいものである。一春にもなれば官能的なあまりに官  
 能的になり過ぎてー

今朝、慣例を破って掃除した。その所爲か曇りはじめ、清冷とした部屋に端座籠楼して

居った。

○朝起の塵をきにする シネラリヤ

○闖入の孕める猫を追拂い

“父危篤”の電報あって村上さん歸省す

8号生

五月十一日（火）

中津先輩来舎 文化部に寄付ありたり。新学期開始後一月半時間中ようやく眠気を起す頃■しきりに我をさそふ、風強く日永き夕暮心中寥々何か物悲しいやうな何かを求めるやうな物あり

五月十二日（水）

昨日の肉に当たると稱して食せし者腹痛を起すといふ。けだし剛健なる胃腸の用意にかけたるものとみる。中津さん歸る。夜食をすると忽ちにして夜半をすぐ、サンマータム居眠りを生む。夜ふかしをするせいか目のふちがびく※※ふるへる。

五月十三日（木）

本日舎生大会を開く、しゃべる者が割合にすくなかった舎生の思想上の交流及び活動が不活発であるといふ意見があった。食事の上着の用、不用に対する議論があったが結局多数決によって、各自の判断にまかせる事となった。他にヒーター、文化部保〇等の事あり。植物園は天気も良かったが人がうじゃ※※居た。大谷さんと一緒に散歩した（〇物実験）あかだも、にれ、ながはぐさ、しろつめくさ、たんぼぼなんかの話からたんぼぼの花の開閉のメカニズム札幌及び北海道の植物及び農作の方針等に関して手広く面白く話してもらった。最後に **Lindenboum** の下で解散した。（但し本物ではないさうな）  
牧笛期日迫る （三角記）

五月十四日（金）

此頃は毎日實に良い春日和が續く、今日もまたうららかな良い天気だった。ハル◇マキは寝くなる。猫は鼠をとることを忘れ、人は働くことを忘れる……とは今日此頃を云ったものだろうか。清潔検査も近々との事。こんな日は大掃除の絶好のチャンスとして選ばれる。今日は四号室がやっていた様だった。

又、日もだん※※長くなって夜の十一時、十二時は早く来るような気がする。村上さんが里から歸られた。 “山崎記”

五月十五日（土）快晴

朝は蕎麦、九号室がいちはやく畳を出して大掃除をはじめ。医学部は、新入生観迎会であった。

午後二時からと六時からと梶原完氏ピアノ独奏会あり、寄宿舍からも出かける者多し  
尚小生祖父儀五月九日日蝕と同時に死去いたしました。皆様の御心配をいただいた事を感謝いたします。 （村上）

五月十六日（日）快晴

今日も亦快適な晴天であった。この調子（天候の）にプラスの適当な雨があれば、本年は略々豊作確実だろう、快適！快適！

一日も速かなる食糧事情の好転を希む。

本日、草地さんと坂井さんの二人が藻岩山登山を企画して出発したるも、途中道路不明になりたる爲、目的挫折、盤溪、幌見、十二軒澤を経て歸舎、それから今は、平さんが夕方（七時頃）の列車で歸舎さる。今日は（一部の部屋で）あの真夏の夜を思はせる蚊の初めての襲撃を受けたり。愈々蚊帳の要る時季が目前に迫り来るか。

五月十七日（月） 快晴

大して面白き事もなく、又一日永遠の彼方へ過ぎ去った。此の処快晴續で初夏の感深く、街行く麗人、日傘もて顔を蔽ふものあり。かくして十号室も又煤拂ひを行う。蚊も我が家の春と許り活躍し出した。

十一号住人

五月二十四日（月）

月次会も明日にせまり、弁士諸兄ねじり鉢巻、舎にベルを取附ける。

五月二十五日（火）

五時より評議員会あり、奥田舎長、平戸、亀井、青木、望月の諸氏が列席され、七時より月次会始まる。北野先輩も列席。二百円の寄附あり、弁士は

- |             |       |
|-------------|-------|
| 一、経済と道德との関係 | 予一 黒島 |
| 二、デッケンズ     | 予二 坂井 |
| 三、大陸移動説     | 予三 三角 |
| 四、電子顕微鏡     | 医一 上野 |
| 五、ハリキュウ     | 医四 河瀬 |

三角さんは、一時間も話したので、皆の顔はとろんとしていた。弁士各位大いに熱弁を振り、一回目の月次会も成功に終わった。

オハギうまかった。 N・K

五月二十八日

ソバの配給あり、久し振りに玉ソバを食した。朝はパン二個 p.m 七時頃から雨が振り出した。

N・I

五月二十九日（土）

今日は朝方より雨が降っていたが、予科対経専の定期戦が小樽で行はれた。グラウンドも恐らくは目茶々々だろうと思はれるが、結果は、野球、庭球に敗れたがラクビー、排球、卓球は勝った由、予科の諸君九時頃歸る。大分おなかを空かしてきた様子。

朝の会合例の如し、別に改った話なし。夜は麻雀を一室で大分遅くまでやっていた。

村上、明智君歸舎す。草地さん黒島君外泊す。河瀬、辻君歸省中

五月三十日（日）

こうも毎日雨続きでは、全く滅入って了う舎生に何か焦立たしさというものが感ぜられ

るのもその故だ。しかし、そのために如何なる行動となってもその人の真価を評することは出来まい。 M・Y

五月三十一日（月）

昼から快調にも快晴となる。しかれども風強し。久し振りに庭球している人も有るがグラウンドのせいか、あまりうまくない様子である。夕方ピンポンの試合が行はれた。

そろ※※決算か I・T

六月一日（火）

暫らく振りで朝から青空をあをぐ事が出来た。然し気温は余り変りはない様だ。昨日から始まったピンポンの試合は、今日は昼頃もやられていた。今の所、三角さんがやはり有力である。ピンポンの成績表の横には砂糖の告示が出たが待ち遠しい事である。

砂糖よ早く来い。

六月二日（水）

卓球の試合 相変わらず益々盛 砂糖の配給汁粉二杯 快調!! がしかし途中で沈没する人、或はまだ足りなさそうな人 その番附を発表したらどうですかね。

六月三日（木） 終日曇って鬱陶しい天気

草地さん外泊の外変化なし。三号室の御○人が清談クラブを始められるさうな。大いにその活躍を傍観者の一人としてお祈りします。去年の福重氏のやった時の様に舎生は僕の様案外さういふことには傍観的であるらしいですから。もっとも清談といふ言葉が其の要素を含みさうな気がします。

祈御活躍 二号室 ゼニトルマン

六月四日（金）晴

幾日振りの快調な天候 寄宿舍のまわりの草も木もそして空飛ぶ鳥も若々しさを取戻した。飯田、山本両氏歸省

（三日の日誌を読んでの僕の見解）

自己満足に対する嫌悪といふ理由によって僕たちは自己満足以に生きているものに対して傍観者であってよいでせうか

（僕は別に作られんとしている会、それが自己満足者の集会だといっているのではありません）

無関心の徳は確かに認められるであります。然し人生の空虚がそこに生じてくるのです。

（冷厳そのものの姿が我々だ）などと言ふ人間、それこそ感情の権化でないでせうか。ピルロン、シャルロンそしてベイル等の懷疑論者が自らの手足を喰ふ章魚であったと同様に、彼等は二十世紀の大章魚であります。僕達は、僕達の眼前に現れたものに対して価値判断をなす必要があります。傍観が人間性の放棄であるといふ非難を逃れ得ないのと動揺に傍観もその非にあふのであります。デカルトは「我疑う、故に我在り」と言いましたが、これは積極的な真理に対する聖なる欲求でなくてなんでしょう。

僕たちは、あの会の価値判断をしなくてはなりません。非なりと判断するならば堂々と闘えば良いのです。可と認めるならば、それに溶け込んでしまおうと努力せねばならないのです。僕達は少くとも傍観者であってはならない。

六月五日（土） 晴

仮稱“清談クラブ”なるものを作って、舎生活をより光輝ある時代とせんため、本日午後六時半より八号室にて、第一回の会合をもよほすつもりなり。私の気持としては、気のすすまない人まで来て貰ふつもりはないので、又一党一派を結成し様といふものでもないですし、村瀬君も言っている様に少しでも関心を持って来て下されば結構です。私は舎の口火をつける役をただけですから、不満な所があれば、集まった人で満足が行く様にして戴きたいと思ひます。

この会は、自己満足をしないうための会です。私達はともすれば、自己満足に陥りがちだ。同志の人が数人集まって真剣に討論する所には、必ず啓発があり、自己反省があり、進歩の在る事を確信す。本会はむしろ自己満足に対する覚醒剤ともなれば、目的は半ば達せられたと云って良いでせう。私は本会の有意義なる発展を心より祈ってやまない。

竹林壯主

平、河村、飯田氏等歸省す。

村瀬君の御母さんが御出になった。

六月六日（日） 晴後曇

中田、吉田、坂井、辻の四名と定山溪に遊びに行く。豫想した程快適な處ではなかったので多少がっかりした。矢張り温泉場などはわれ※※の行くべきところではないらしい。若し諸君があの方面に行かうとするならば、定山溪よりむしろ簾舞に行かれんことをおすすめる。後者の方が遙かに若人の期待に應え得るであろう。

午後六時、公民館にて、豫科の音楽祭あり。MISS 深雪の独唱外に聞くべきものはなし

T・O

六月七日（月） 曇後晴

月曜日の朝学校に行く事程いやな事はない。なぜなら日曜日の後であるから。昼頃から天気の良いなってきた。庭球をしている方もいらっしやった。

六月八日（火） 晴

夕方六時半より我が舎に於て、和歌山県人寮との卓球の試合がある。仙台寮の時敗けたからぜひ勝って欲しいと思って一生懸命応援する。選手は大いに頑張って大勝す。

六月九日（水） 晴時々曇

だん※※夏らしくなってきた。天気がよいので皆んな運動や薪切りをする。夕方には少し蒸し暑かったので散歩に行く人も多い。

一日の中で夕方が一番心が落ち着かない時であるから。皆んな変な事件を起さない様に注意ませう。大類氏の計算によると湿度七八%だそうですから。山崎氏歸省

六月十日（木） 晴後曇

今日より予科祭、十四日迄である。天気が良いので、午前中は植物園へ読書に出掛けた人も二・三あった。午後は少し曇天なれども平氏等病院裏プールへ水浴びに行く。

日一日と夏らしくなって来た。此の頃の蒸し暑さには少々悩まされるが、だん※※と道行く人の白めるのが何か新しいものを感じさせる。祭が続くのでだらけぬ様気を付けてゆこう。

五号室住人

六月十一日

全く夏らしくなった。豫科生諸君はそれぞれ思ひ思ひに休みを楽しく過している。

折内君の御両親が来られ泊まれる。中田君十時半の汽車で家に歸る。

失礼（草地記）

六月十二日 晴後小雨 アルバイト休み

O・Y・T三氏と予科祭を見にゆく、昨年よりは盛大である。営繕課の人らしき者二、三人来て、テニスコート、畠の所で地図を広げたり、距離を測ったり・・いよ※※家が立つのかと感無量!!

K・K氏の卓球上達目ざましく「下手の横好き」の時代より「好きこそもの上手なれ」の時代に進んだ事は万人?の認める所但し寫眞の方は目下原始時代らしいとの噂、夕方六時より第二回清談会開催。

予科生諸君の顔色の予報及変化（六号室气象台発表）

十日・十一日 晴 十二日 晴後曇 次第に雲が多くなります。

十三日 曇り勝ちのお天気で時々晴間を見ませう。

十四日 曇後雨 低気圧は北八条西五丁目にあり、当分雨の日が続きます。（凡平）

六月十三日（日） 雨

六号室气象台発表の天気豫報は見事にはずれ、朝から晩まで雨・雨・雨、晴れ間は一回も見せません。

大類君と“カルメン”を観る。小生は、あのカルメンの様な態度を見ると腹がたつ。

所が某氏によるとヒューマニストは、カルメンの態度に調和を感じ、美を認めるのだそう。そんな見方もあるのかと感心する。（河瀬記）

六月十四日（月） 曇天

予科最後の休み、今日の天気が曇よりしているように皆の心もくすぶっているような気がするの、我が心の故か?或ひは天気 of せい。草地氏外泊 K S

六月十五日（火） 曇

本日、札幌神社祭、なれば喰に利あり。

・祭には喰うがよけれ、弊衣なり。

六月十六日（水）

本日後祭り。やはり食はぬと祭りのしめくくりがつかぬ。食中食後にわたり（我が室に於ける）将棋を行ふ。村上さんに勝つてにやりとしたら河瀬さんにプロマイドをさらはれた。試験知らさる。

六月十七日（木） 晴れたり曇ったり

授業料の事でストライキをすると新聞にあり。その交渉の事実をくはしくはしらねども朝食の時話しせる者あり。「それ可なるや不可なるや」は實際の状態により慎重にする必要あるも、そもそも学校の授業料と云ふものの存在といふ事にも大いなるうたがいのあるところである。僕の考へは、授業料は進むべき方向としてなくなるべきものであり、教育費の国庫より全額支出さるべきものなる事は、何人も首肯する事だろうと思ふ。ところで現在の学制のまま、ただちに實現するには相當の不合理がある。

又大きな困難がある。主なるものは、國富の貧少であり、学生たる者のたりえた制度社会状態である。しかし現在の学生層はその成立の方法の○向とは別にその状態が決して安逸なる者のみよりなるものでない事は、皆みとめるだろうと思ふのである。その状態よりみて授業料の値上げはその学生に対する負擔及びその心理的影響よりも弾圧的に強ひるのは不當だと思う。この値上げによりどれだけの國家財政に寄與するかしらないが、もしこれが私学、下級学校及び他物價とのつり合等といふ事がふくまれるとすれば、それこそ大きなまちがいだといひたいのである。且それに示される如き道德？習慣的社会感情等こそ新たなる社会道德によって一掃さるべきだと思ふのである。且、僕がストライキを或る線迄検討した上で支援するといふ事、又そういふあらゆる態度に関して米國から受ける圧迫から来る反発的感情を常に吟味する事によりより米國に対する反動的○思想を○ちせよといふ事のない様にありたい。

しかし、それは相當無理でさる。 （三角）

六月十七日（木） 晴

暑いと云ふ程の天気でないが丁度いい位の天気だった。夕方にはテニス、ピンポンが相変わらず行はれていた。平さんのヤンガーブラザーが来ていた様だった。昨日遅く迄起きていたので今日はガンツーねむたかった。授業中 **yawn** が出てしかたがなかった。

六月十八日 風あり朝方は雨ですが後晴

折内君が発熱の様子であった。近頃はガスの供給が悪く不便でならない。一時頃からでないといけないらしい。今日は一日中うすら寒い風が吹き午後から少し雨がばらついたがすぐ止んだ。夕食は久しぶりにライスカレー。予科の試験が近づいたせいかな今日はピンポンの音をあまり聞かなかった。

六月十九日（土）

良い天気、朝会食があった。バレーの球が出来てきてバレーやドッチボールに夕食後の一時を楽しんだ。八時から十一時過ぎまで清談クラブがあった。折内君は岩内へ、山本君は歸省、黒島君外泊

私は思ふ

私達はお互に眞実に尊敬しあつて行きたい。

尊敬らしいものを交換して相互に自己満足をみたしてゆく様な態度を心底から憎悪する。眞實なる生活の追及——学生として学問と求道をはなれた空しい雑談に再び歸らぬ若き



日を蝕む時間潰し屋（クロノ、ファージ）を心底から憎悪する。そんな傾向を寄宿舎と自分の中に見出して、現在舎生活の魂の内容が眞に自由人のそれではなく奴隷人のそれではあるまいかと危惧する。（村上）

六月二十日（日）

天气に恵まれた素晴らしい日曜日

人おの※※に、おのがじく、夢を追ふて斉田愛子のアルト鑑賞に行くもの多し。

上野君、折内君、山本君歸舎（村上）

六月二十一日（月）薄曇り後小雨あり

空の曇り方までとすっかり夏らしくなって今日は、あの夏の夕立を思わせる様な雷が鳴って居た。もう待望の **Summer Vacation** も残り一と月と僅かになった。一と！それ以前に学期末試験で一苦勞だが……。その準備に専念してか各部屋の諸兄夜半迄も猛勉の模様、草地さん外泊

六月二十三日（水）晴

農学部1年目宝示戸氏入舎

六月二十四日（木）晴

午後六時半より月次會を行なった。

来賓は宮部先生一人。村上さんの司會

先づ最初に

一、原子の人工破壊について 予科三年目 大類徹哉

二、空想的一構想としての故郷 予科一年目 村瀬 勉

（大変興奮して熱辨を振って居た様です。）

三、救荒動物について 予科二年目 吉田 司

（非常に落着いてまじめな顔をして演段に登ったかと思つたがいきなり聴衆をふき出させた）

四、製鉄について 工学部一年目 角田和夫

（いつものパーマメントも今日はめづらしくトンボになりそこねてまじめな顔をしてぼつりぼつりと話し出した）

五、漱石の作品にあらわれた女性 医学部二年目 平 巖

（これにはいささかびっくりしたのだが漱石全集十冊あまりせまい机の上につんで種本をちらちらとにらめながら話した。いつもの鉄面皮で、あきれたものだ）

六、遺傳について 医学部四年目 草地良作

（彼の云いそうな事だとは思ひましたが、いかめしい演題を出して如何んな話かと思つたら、美人とハゲの遺傳を顔をほてらせながら話した）

大変悪口を書きなぐりましたが、辨氏六人とも眞剣に話をして下さった事は事實で、熱意に対して感謝の外はありません。面白くそして有益な話でした。宮部先生は、大分つかれた様でした。會のあと福重兄弟の送別會があり、シルコが出た。

六月二十五日（金）

授業料値上げ反対。文教予算の増額等をスローガンに同盟休校に入るもの、農学部、工学部、土専、農専、入らざるもの、医学部、理学部、医専、どちらが正當か、両方共に勿論正當な理由がある訳であらう。

此のストでどれだけの効果があるかは見ものである。

六月二十六日（土） 晴

スト續行。早起デー。アルバイト無し。会食のみ行ふ。銭函へ水泳に行く話し出づ、参加者少し

六月二十七日（日） 快晴

朝飯をスランとする者数名、遂に銭函への水泳は流る。毎度の事である。カンチャンの寫眞屋大いに繁成。夜、福重兄弟舎を出づ。有爲な人々を送り出して舎もさびしい。予科生の試験迫る。余り勉強していそうにもない。十一号室は相変わらず麻雀をやる。毎度の事で気がひける。

六月二十八日（月） 晴天 暑し

グン※※暑くなって来た。全く眞裸で暮したい位だ。舎生諸君の寝相をのぞいたら、さぞ素晴らしいだろう。今日は夕方バレーをやり面白かった。スポーツは全く我々の細胞に生吹きを与へる。一日一時間で良いから跳ねたり飛んだりしたが良いらしい。

一号室の春はいささかも衰退を見せていない。甘き生を来れ!! バッハ。

六月二十九日（火） 晴

新聞によると昨日の暑さは八十五度、全国一だ相だ。全く暑い。一昨年は今日あたりより休暇になったのにと思へば……

河村写真屋、仲々繁盛の様子、製造より買手が少しより少くないと。

六月三十日（水） 晴 特別室 平 記

今日も同様の暑さである。上衣を着て講義を受ける人殆んどなし。今夕、砂糖配給あり。一人二百匁づゝで **gold** 二百円か **rice** 七合の割、砂糖への魅力は全然消えうせた感が其の配給風景からも察せられる。

今月末の決算を八時より行ふ。出席、平、坂井、宝示戸外五、六名。一日食費十六円最高は部費五百円を含めて千百七拾円であった。目前にせまった運賃の二倍近くの値上の問題に伴う諸種物価の改訂により来月或はその次あたりの食費等の膨張より四月始めの予算では如何ともし得ず、結局大中の舎予算改訂もせまって来るのではないかと考へられる。現実の問題として、電燈量三倍値上が実施され、一ヶ月千六百円前後となり、一人平均七、八十円に達するのではないかと思はれる。

物価改訂に対しては、今から舎生全体が慎重に考へておく必要があると思ふ。休暇が七月末よりになった事で六月一杯、或は七月上旬の予定より樹ててなかつた食糧部が大分脅威を身に感じつゝある。かてて加へて毎月五日分程の **zucher** の代替配給、それに九日に変へんとする欠配は、全く吾々の食生活をおびやかさずにはおかない。吉田食糧部

長の労苦察するに余りあるものがあると信じる。今日の **zucher** の大量放出もこんな事に因するのと思はれ度い。

中川労働部長、いつもの事乍ら、今晚も八時すぎまで飛行場の舎の畠へ一人で芋の土かけに出掛けられた。全く御苦労様と感謝の外はない。彼の尽力による **DDT** の特配等、全く枚擧にいとまがないと思ふ。アルバイトは以前より舎生が積極的になって来たことは認められるが、彼のように全く奉仕的であるのをまのあたりみでは吾々一同深く反省せねばならぬと考えられる。

明日より“文月”よく言ったもので予科生の諸君は七日より10にちまで、医学部二、四年目は七月中旬より、夫々二週間乃至一ヶ月半に亘って試験が行はれる。夜遅くまで各部屋で電燈がともっているのは、猛勉にとりついたものと思はれる。

吉田君「トモヘフード」を持って各部屋訪問す。結局二、三名の申し込みより得られなかった由。

村上君現在旭川へ歸省、とかく舎を留守にし勝ちの森田君も今日、昨日あたりより落ち着いた様子  
一以上一

七月一日（木） 小雨

本日から愈々七月に入った。先日来の王恩も昨夜来の小雨で全く気持良く感ずる。しかれども何となくむし暑し。

予科医学部の試験目前にせまり、諸兄朝から晩まで猛勉に猛勉、昨日のサトウでエッセン作る者多し。たちまちツッカーなくなるだろう。

中川さんはいつもの事ながら一生懸命アルバイト、全く感謝する外はない。近く歸省するとの事。エッセンの配給状態は益々悲壯を極めて来て吉田さんもあらゆる努力を拂っている様子  
—一室住人記—

七月二日（金） 小雨

昨日からずっと小雨でやっと涼しくなった感じがする。新聞に七月満配と書いて有る。これで舎のエッセンも一安心と云ふ處で有る。諸兄、連日猛勉して居るらしい。夜おそく迄アカリがついて居る。

七月三日（土） 雨

二、三日の雨で気分は全く爽快となった。試験間近で皆焦燥な所がある。中川氏歸省遠路御苦労のことと思ふ。数人で見送りに行く。

七月四日（日） 曇

予科試験前最後の日曜であるが一般にのんびりとして居た。夜おそく迄頑張るのであらう。小母さん昨日から角田へ行かれたので男ではあるが若い小母さん達がエッセン作りに大奮。今日は朝は森田さん、折内さん、晩は上野さん、河瀬さん大いに腕をふるって下さる。御陰で皆おいしく頂く事が出来た。中川さん昨日歸省された爲今日は何時よりも何かしらさびしくかんずる。安着を御祈りし様。

七月五日（火） 晴

しばらく振りで晴れる。授業は全くの消もうであった。試験を目前に控へ予科生諸君は猛勉強らしい。

七月七日（水） 晴

豫科生諸君待望の試験来る。此の日、天は恰も我々を祝福する如く晴れ渡り？と言ふ様な譯です。午前中は、二、三年目理科、午後は一年目及文類の諸君。出発の意気は盛んなれども歸って来る時は、ズッタ※※の連続とは。

さすがに夜は静かです。試験の前日の様なファイトを持って何時も勉強したらと思ふのは僕だけではありますまい。必要が最大にならなくてはほったらかしにして置いて苦い涙を持つ人。案外そんなことに人生のキーポイントがあるのかも知りませんが試験前の自分が嫌になります。 “二号室”

七月八日（木） 曇

**How, we know that life is only a stage to play the fool upon as long as the part amuses us. -New Arabian Nights-**

考えように依っては零とかコンデとかいふ文字も **a part** である事を僕は豫科の初めての試験で獲得した。

飯田氏歸舎す。乾パン数十ヶ配給になる。

七月九日（金） 曇

初キウリの配給。夏の味がする。予科生諸君も明日一日で終り。皆大いに頑張っている。十一号室あたりで“俺は満点だ”といふ奇声も聞える。悼尾の勇を振はれん事を祈る。予科生活の第一の意義は、人生の探究にあり。私の如く手遅れとならざる様祈りて止まなぬ。 竹林莊主

七月十日（土） 曇

本日を以って豫科の試験終了。急に張合ひ抜けしたやうだ。僕のような馬車馬的性格のものは鞭うたれなければ何もしたくない。

ちよい※※試験があるといふとつく※※思ふ。先輩諸兄のご鞭撻をお願いします。

午後より藤原義江独唱会に行く。僕には藤原氏の幾分尊大な勿体ぶった態度に些か反感をかんだ。しかし砂原美智子さんのソプラノにはすっかり感激した。ステージに立って一年ほどしかたっていないせいか、少しもずれた様な感じなくて、花束を贈られて微笑んだときなどは、ガンツ、チャーミングだった。舎生のきょにいくもの多し。

七月十一日（日） 曇時々雨

朝から陰うつな天気である。試験が終って気持がゆるんだせいか、朝食をくってからまたぐったりねる。午後オリンピヤを見に行く。最後に孫がマラソンで優勝して日の丸がひら※※と昇り、君が代が奏せられるシーンは非常に印象的だった。山本君歸舎す。

T・O

七月十二日（月） 曇

相変はず変な天気だ。予科の試験が終りだん※※夏休みが近づいて来るので何だかの

んびりしている。学校に言っても教授もあまり来ない。夕方には蒸し暑いので皆んな方々へのんびりと散歩へ行った。試験の時のほりきった気持ちがやはり学生には重要ではないだろうか。

七月十三日（火） 晴

久しぶりの暑さだ。何処か雨後の涼しさを感じさせ乍らもやはり夏の日の路ゆく人のひたいに汗が滲む。坂井氏歸省中。

学生には試験の時のほりきった気持ちが大切ではあらうけれども学生もやはり人間だと思ふ。

七月十四日（水） 晴

うらめしい暑さが到来。泥縄式の勉強もしやくにさわるが、そうかと云ってしないと退屈になりそうなので、あえぎ※※遅々として歩む。炎暑に照らしつけられた牛そのものである。今夜は呑気に朝方まで碁を打つ馬鹿者も居た。坂井君歸舎。テニスコートに石を運び来る。

七月十五日（木） 晴

一日蟄居 外〇知らず。米の配給あり。変わったことなし。

七月十六日

本日はもち米が配給になり、早速夕食はポタモチ一人六ヶ、‘快調’と云って食べ始めるが、六ヶもあるので残す人多し。三角君は例の巨大な胃袋で大分活躍したらしい。かく申す小生も二ヶばかり手傳った。寄宿舎は御馳走のとき一般に量が多すぎるとの声あり。

河瀬 記

七月十八日（日）

朝カラ舎ニイナカッタノデ、舎ニトッテドンナ日曜ダッタカハサッパリワカラヌ。夕方歸舎スルト二、三人ノ者ガボールヲ投ゲタリバットヲ振ッテキル。夏休ミラシイ、ソシテ日曜日ラシイ平和ナ夕暮ノヒトトキデアル

七月十七日（土）

終日ネム気におそわれる。夜は井口基成のピアノを聞きに行った人が数名いた。大きな感銘を与へた様だ。

七月十九日（月） 晴

「東の風晴れたり曇たり」と傳へられた朝の天気予報とは少しちがって一日中暑い天気だ。朝食はアメリカ麦粉（**Maybe, I think so**）のやゝ 〇度の大きいフカシパン、夕食は久し振りに五目飯。夕食の前に鯿の配給があった。上野さんの兄さんが来て居られる様だ。吉田さんが百円でかけをした蟬を三角さんが見る※※うちに喰ってしまった。さすがの救荒動物学者もこれには驚いたらしい。夕方九時頃代用バターの配給あり。

予科の試験も終り、夏休もあと一週間たらずで来ると云ふ今日此頃の夕食後の一時、書物には一寸とつき難いむし暑さに当に身の置き所に苦しむといったところ。その内に皆はどこへ行ったのか知らないが舎には三、四人しか残っていなかった。多分散歩にて

も出かけたのだろう 一山崎 記一

七月二十日（火） 早

今井が死んださうだ。今年芦別から歸った時から寄宿舎に居なかったが。近頃はあまり会はずだったが、あのやうな奴に又会へるか。世の中は廣い。人生に於ける二十年は短いかも知れない。だが彼にまた会へるか。自分で何時も死生静観と考へてみてもそこからぐらつく。親父やぢいさんばあさんなんかとはちがふ彼等はどうせ早く死ぬべきだ。今井が死んだ。ただ、今は何ともいはれない。今ある思はやがて消えるだらう。だけど彼はまだ早い。自分が今死ぬとしても最も自然な死に方はだがそれが出来るか。忘れる様なことを書くのは無意義か彼の自分に対するひかへ気、今はしみ※※思ふ。僕が自分の気分本位に言ひちらしやりちらす時、彼の態度は僕の出あたり次第にしゃべるなす時、彼の態度は僕は始め今井をけい遠した次にきらったといふよりもあつた。そして彼の静かに事にたへて受流してゆく姿を見出した時、自分の事をまた感じた。人は人をあらばかり見やすい。

そして彼がふたたびかへらぬ時その大を思ふのだ。人が人の價値をすべての人に見出し得る時自らの價値を見出し得る。勝手な事を書散しても、これも一時の発作だろう。彼に英語の試験の前の晩通譯してもらって出かけた事。僕はそんな事ばかりしていた男だ。彼が将棋をやらうといふ時、僕は彼を楽しませない爲といつてもいい。首をふ〇〇。そんな時彼はだまって笑ふ。僕は元来非常なけちである。これは臆病な事と同じに僕の天性である。人が僕をどう見ようと自分の事は自分が知る。しかし、人は天性にのみでだけ成立つものではない。しかしそれは皮だ。底までむけば地がでるものかも知れない。人はその皮を厚くすることが出来るだけだ。僕が中学生の安價な生意氣自負だけを持って舎に来た時、同輩から先輩からどんなに〇らされたか。始めは自分のカラにしがみつく。そしてそれがあはれな何ものでもない事に気がついた時、しかたなしにそれをはなれて泳ぎだす。そして、しょつ中皮をはがれて中味を見せつけられる。人は自分の生活を支へているあらゆるものに代障を与へる事等は、それをすべて知る事だつて出来はしない。人に出来るのは、それを受取る事だけだ。そしてもらったものをつかふ事だけなのだ。今井が死んだのに僕が出来るのは、僕の生活をする事だけだ。今井に最後に会った時、彼とピンポンをした。彼の舎を去ってからの生活は知らない。彼が自分の生活に対して高くいてそれを言ふのは卑怯ではないかと言つたのを思い出す。

（三角）

七月二十一日（水）

今井君の死が傳へられた。状差しに俳句雑誌「かすみ」が来て居り、—それは僕が彼にすゝめたものであつた。— やがて彼が取りに現れるだらうと心待ちにしていたのに、心臓麻痺で逝かれたのであつた。

彼の兄さんとは同室だつた事がある。彼とは同室だつたことはない。然し今年の冬、寄宿舎に於ける冬ごもり仲間として、ローソク送電の下、第九やウィルヘルム・テルを楽

しみ、松本喬 を語り、山口青邨を富安風生を高濱虚子を論じ合い、果ては、小母さんの所から一但し小母さんの留守に一マーガリンと餅を持ち出して二人だけでテンブラにしてくれた事も忘れられない。十二号室のエントツ掃除は、冬ごもり最中の一番憂うつな仕事であるが、あるとき、スレートの外エントツが割れたため交換の爲に彼は屋根に上った。丁度雪が少ない時とて、足をすべらして、あはや落ちかかろうとしたが僅に二本の丸太の支へにすがりついて助かったことも目の前に浮んで来る。

同じ十二号室で、彼の一家、お母さんと兄さんがやって来られて、その前年苦辛してつくられた砂糖大根のお汁粉の饗応に興ったこともなつかしい思い出の一つである。

彼は、飾り気の少ない素直な人間の一人で親しみのこもった笑声をあげてよく笑ふくせがあった。舎を出られてからの彼の姿は何か影の薄いものの様に思はれてならなかったが、今彼の逝去を聞いて心からさびしく思ふ。謹んで哀悼の意を表する。

今日は曇りであったが夕方から日が射した。テニスコートの家が半分ほども骨組を立てた。どうやら二階家らしい。夕方砂糖の配給ありき、井一杯

七月二十二日（木）

今日も晴天、三角君リュックを背負って空沼小屋へ、それからどこへ出るかはまだ決め手いないそう。出来たら支笏湖へ出たいとの事。元気よく一人ででかけた。

赤と白と黄と緋の絞りのダリヤが小母さんの丹精よろしくクキーンの如く、キングの如く王子の如く王女の如くに咲き誇っている。欲しいと思へばすぐくれる。誠に良きわが小母さんよ。

泉田君が紳士、淑女監視の眞中でサカダチ転倒して挫傷、全治三日、送ってあげませうといふ人（勿論淑女の方です）もあったとか。彼感激する事甚しく（これはコーラス練習の時のこと。）といふわけで今朝はいつもよりもいよ※※美事に唱ってをられたことの説明がつかませう。

夕方は食堂に集って、ザル碁ともいへない碁学に、朝鮮五目に余念がなく、典型的な朝鮮人種は平君あたりと決まった。

相馬君の入舎が発表されている。ピアニストといふだけにわが舎の楽人倶楽部の面々も大いに喜んでいる様子である

草地君は明日岩下教授の、私は奥田教授の試験である。武運長久を祈ってくれ給へ

村上

七月二十三日（金） 晴時々薄曇り

村上さんと草地さんが本日十時より試験だった。御兩人共九時半頃自信満々の面持ちで出かけられたが、その首尾は、案の定、快調だったらしい。

テニスコートに建つ家の建築は、快適に進捗している。皆が歸省している中に、屹度完成するだらう。扨て、待望の休（こう目前に迫ると、待望の感じも聊か薄らぐが…）も愈々明後日からである。試験で舎に残る河瀬さん、村上さん、草地さんには気の毒な様だが…もう皆は、休暇の過し方にしっかりした各自のプランを持っているだろうか…。

どうか勉強するにも遊ぶにも、又アルバイトするにも有意義な立派な生活を送れる様、心から念願している。“ヨク学ビ、ヨク遊ベ”の“ヨク遊ベ”を適当に…

本日夕刻、中津さん来舎され（御出張で）そのお土産に、又、五目やブラックティーの乾杯等で我が部屋夜半迄も賑う。坂井さんが今日初めての **tutor** を勤めて来られた。

七月二十四日（土） 晴時々曇

暑さもこの所本格的だが、プールに入るとやはり寒い。まだ眞夏ではないのか？夜は映画見に行く者が多いようだった。辻、草地氏外泊する。夜間の外は涼しい。

七月二十五日（日） 晴

予科の休暇も本格的に今日から始まる。歸省するもの、折内、黒島、山崎、辻等多数明朝歸省の村瀬がへり結局現在在舎生、平、吉田、坂井、上野、大類、中田、草地、河瀬、泉田、三角、村上、河村、飯田の十三名、草地外泊、今日の暑さが本年随一の由

七月二十六日（月） 曇

舎も全く閑散として来た。昼などは居ても皆と云っても五、六人が夫々駄眠をむさぼっている、ひっそりとして淋しい位。

三角君が今日支笏湖へ行ってからは、晩も昼の状態がそのままづく。

暑さも峠をこえたらしく、今晚などは涼しい位、明日は土用のうしの日とか、小生が試験終了後の暑さを見越して一泳ぎしようと言ふ出鼻をくじかれた形である。

夜おはぎ四ヶ、大きなのが四つもある。最後の一つで目を白黒させてやう※※のみ込んだ様な次第

解散コンパ（今頃ちとをかしいが）三十一日に決定す。

七月二十七日（火） 晴

温度は高いと思はれないが湿度の影響で夜もむし暑さが感覚される。それに蚊の攻夷に出合つてろくにねも付かれない状態だ。「蚊帳の所有者は別だが」奮戦ぶり誠に涙ぐましくものに価するを諸兄等は知るや否や。電気を消して蚊の空襲を容易ならしめ、かく近付けて、サーチライトの元に我方の死もの狂の反撃、パチ※※※※の連打、戦果甚大、見よ我が壁に血痕歴々たるものあり。而して他の部屋のパチ※※の奮戦の音を聞いては苦笑して假眠するのである。

七月二十八日（水） 曇

終日、閑散。現在残留舎生十三名、中旅行一名。

暑さは中休みの模様、新聞では又暑くなる由。斯ふ、淋しくなると一寸家が懐しくなりさうです。勉強はさっぱり進みません。

七月二十九日（木） 曇後晴

午後からはとても暑くなった。今日の米屋は一日中大繁昌、夕食時、三十一日のコンパに出す食物の決定を多数決を以てテンプラウドンとし、食後、喫茶店歩きをする事にした。草地外泊。

蚊に襲来されぬ最も簡単な方法をお教え申さうか。蚊を追い出した押入れの中に寝ると



は如何。少々暑苦しいが、ネズミも近寄らないので、一石二鳥と思ふ。

一号室は、殊更甘きギターの音に吸寄せられる虫ども多ければ、これを獲ってツクダニにでもして食せば副食に事缺かず。

七月三十日（金） 雨

珍しき雨、作物は大いに喜びぐんとのびた事だろう。明日からは又お天気らしき夜の空模様である。小生の試験も後明日一日を残すのみとなり、今日は至極のんびり小半日レコードをかけて独り楽しむ。雨で外出も出来ず殆んど全残留生が舎に終日居た。

昼のエッセン時は各グループで仲々のにぎはひ、夕食は又々おはぎ、一人五ヶに、それにジャンケンで二人に一個の割であたる

新入舎生の相馬君、荷物を持って見へらる。

明日か明後日入舎の由。夕方石炭の配給あり、全員で忽ち運んで了う。

二、三日前に書いたつもりの日記忽ち廻って来たので不思議と思へば、二号室より十二号室までとんでいた事判明、コレハ※※と言ふ所

七月三十一日（土） 晴

月末である。今日は決算、解散コンパで仲々多忙だった。決算になると誰にも一沫のあわれさが感ぜられる。俺も思はず襟をかき合せた。一種の寒気を催すのだ。これが月一回、週期的に見舞はれるとしたら、吾々も同情すべき宿命を持ち来ったものだ。

宝示戸先生、臨時歸舎、お餅の土産を戴く

夕食、手打うどん各自二杯、俺は喰切れなかった。上品ではあるが損な男だ。主旨は解散コンパであるが、その中歸省する人は平先生一人だ。何だか送別コンパの様な気もし、うどんもダンゴを喰った様な腹持だ。

食後外出、ワイヒな喫茶店でアイスクリーム一杯、キャンデー一本、歸舎して終床

八月一日（日） 晴

八月の発足日だ。何としても気分が活力が充たされることは確かだ。それに明日の海水浴と来ている。少し昨日の舎費の痛みは残っているにしても兎に角快適であるとは誰にも言へるだらう。舎に事なし。

八月二日（月） 晴

平、泉田、大類、相馬、坂井、中田、河村、奥 三枝子、吉田（さんの敬稱を除く）銭函へ遊泳に出かく。気温三十一度、晴天、絶好のチャンスである。飯、パン、キュリ、スルメ、豆甚だ御粗末な献立であるが、それでも嬉しいものだ。月曜と言ふのに大した人出だ。ヒマ人の多いのに今更驚愕せざるを得ない。我輩も十九世紀的な海水着を着てみる。外に大したものを着けていないのには別に恥づべきものでもない。しかし、兎に角、正気できないのは確かだ。皆、夫々の流派を発揮して泳いでいる様だった。時間の立つにつれて快味も増して来た。その快味は、知る人のみ知るのであって、こゝに書いてもきりが無い。今日の収穫大いにありに尽きる。日焼には少々参った由。中田、坂井先生、歸舎後きゅりを輪切りにして鼻の頭を撫で廻していた。天来の妙薬だそうである。

それなりに皆心得たものですな。

上野先生、旭川から味そをトラックで運ばれる。

八月三日（火） 晴

昨日の記事は、正に傑作、賞品でも贈呈したい所です。竹林荘主は、昨日のドライブで、まだ豊が動いて居る様で、一日舎にへばりついて居た。

八月四日（水） 晴

嫌がる諸彦の中より、無理に坂井君を引張り出して、幌平橋まで荷車を引張って味噌をとりに行く。坂井君も私も大分日光浴になりました。歸って二人で砂糖水をポンポンになる位飲んで、一時に疲れを腹の中に飲込んだ。

八月五日（木） 晴後曇雨

暑い※※、人も作物もグンニヤリして居る

八月六日（金） 晴

呼鈴が獰猛に二度続いて鳴るので、スハ子供の悪戯と思ひ、意気込んで飛出すと、宮部先生でした。ビックリしてマゴ※※して居ると（パンツ一つだったので）「そのまゝで良い」と言はれるので恐る※※近ずくと、寄宿舎に「野心論」なる本が有ったら借して呉れとの事でした。泉田さんが調べに行つて居る間、手でヘソをかくしてモヂ※※して居ると、先生がニヤ※※笑ながら「暑いね」と云はれたのに思わず頭を搔いて恐縮さぜるを得なかつた。それでも、「良い体だね」と褒められて、思わず汗がタラ※※と流れ始めた。残念ながら本は無かつた。「寄贈した本が無くなる様では困まる」と、一寸御小言を頂戴して、益々恐縮して引下つた。暑い日の清涼剤の一服。

竹林荘主

八月七日（土） 晴

相変わらず暑き一日。医学部の試験前、河瀬、村上大先生ともこんなに暑いのに蒼くなって消耗している。ドレ※※獰猛居士も頭を叩いて、もう何も頭にはいらないと悲鳴を擧げていた。毎度の事ながら洵にお気の毒な次第。これで終りですから、記念のためにもっと消耗した方が学生生活を意義あらしめるのではなからうか。などと他事と思つて大平楽を並べたてている。小生にもそろに秋風が身にしみる思ひです。(未だ早いかな)。諸君猛勉して、前者の轍を踏むべからず。

八月八日（日） 晴

舎内は一日中、ひっそり閑としている。古い形容だが、まるで山寺の様だ。小生は注射のため、体だるく一日中惰眠を貪る。

八月九日（月） 晴

今日も燃える様な暑さ。しかし、舎の野菜は、オバさんの手入ですく※※伸びていた。特にキウリ、ナスは素晴らしい。某氏、キウリをかじりながら、俺はキウリを食ふから腹の工合がとていゝと変な自慢をしている。聞くところによれば、毎日五本づゝ食ふと食慾が昂進してもり※※ファイトが出るさうだ。某氏は頗るエネルギーな顔つきに

なっている。

八月十日（火） 晴

晴々々々……暑々々々……何時になったら涼しくなることやら。こう暑さが続いてはもう形容も大方品切れ。ヤレ※※なんでもかでもインフレだなあ。

大類、吉田大先生、御出張。御苦労だか、御気毒だか其の辺はまづさう感謝の意を捧げて歸舎後の御感想をお聞き致さん。

医学部四年目の方、明日試験、毎日御奮闘祈武運長久、別に変ったことなし。夕食時ドレドレ DOCTOR の公務員のストに対する見解を拝聴

八月十一日（水） 晴時々曇

終日閑散。午後、今にも降りそうだったが遂に降らず。

現在残留舎生、草地、村上、河瀬、泉田、上野、相馬、中田、河村、坂井の諸氏、大類、吉田両氏、舎の用事で旅行中。

じき、工学部、法文学部始まる。豫科は、大体半分過ぎる、ざんき※※!!

八月十二日（木） 晴

連日と同じ暑さ。

主食配給、小麦粉、トウキビ粉等七日分、此れで一助り。大類、吉田両氏歸舎、御苦労さん。重くて消耗したとのお話、二米もあらう長いかの有名なる日高昆布、土産、飯田大先生のお家は、ガンツ・ブルなる由、河村氏歸省

八月十三日（金） 雨時々曇

朝、雨で目を覚ます。終日涼しく、人も草木も生かへりたる心持、快調!!

夕食、お汁粉、感激、福重弟氏遊びに来る。をばさんは、佛様なんかどうでもよいですから生佛様を大いに拝んで、そして、必ず最大限の御馳走を供へられんことを。効果は佛様より確実、但し、本当の佛様の効果の確実性は、無限小なるにより、生佛様は無小より幾分大なるの意なり。

八月十四日（土） 晴

昨日の雨も降〇。再び天気が良くなる。何となく秋の感じが深い。

秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞ驚かれぬる

位の所ですかな。

三角大先生、アルバイトの中休お盆によりして歸り来る。ます※※異擴張なる由。どうも困ったものですね。

晩、大類、三角、吉田、坂井の四氏、福重氏宅訪問、家の前で、得意のジャンケンを始めた。向ひのメツチェン色々さぞ驚いたことならん。

夕食、ライスカレー。明日は何かな？

出せ※※エッセン出せ

出さぬとかつちやくぞ



※※と調子を合はせたり、感興に種々起伏があったが概念的に云って、舎に対する親愛の度が入舎前の豫想以上に加速度的に増加し、入舎し立の様な気がしないのは、何とした事だらう。

現在歸省して居る人達が近々歸舎したら、俺の方が古顔の様な面をして出迎へるかも知れない。毎日顔を合はせる人達は、どの人も良い方々ばかりで、おまけに面白い。結局それだから此の舎が好きになり他人気がしないんだらう。人間が或る場所に到着を得るためには、精神的な環境が第一義だ。

心の落ち着きを得て生活し得るといふ事は何と貴重なことだろう。食物が前より悪くなったって一旦し、此の寮は、小母さんの苦心のお蔭で悪くないが、物が食へなくたって適当に腹が満ちて居れば、余裕のある時には好きな様に好き勝手な物を作って楽しんだりする方がどれだけ良いか解らない。

尤も食へない苦痛が如何に大きいものか、俺にも経験があるし、生活の苦しみがどんなに精神的の苦しみと憂うつを作り出すかと云ふことも良く解る。それだからと云って「人間はパンが無くては生きられない」という言葉を以って「人はパンのみにては生くるものにあらず」と云ふ諺に反駁したりはしたくない。

前者は、確かに事實であるが、それが利用される時には、往々にして意味が狭く解釈される傾がある

そう云ふ精神的な観点から親の家はたしかに良いものだ。だれしも一特殊な事情の一を除いては一温い環境の第一に家をあげるだらう。だが、余所の家庭では、如何にその家の人が良くても親の家程には行かない。

しかも、そんなに良いことは稀で、其の他の大小各種の出来事は総て気まずい方に自分を引っぱるものだ。俺はそんな意味で端的に言へばこの寄宿舎が好きになったのだ。

日記が自分の事に流れてしまつて日記にならない様だが、村上さん、村瀬さん、草地さんが卒業試験が終れば間もなく舎を出られるとの事であるが、入舎後日も浅いのに折角なじみになった人達と別れるのは甚だ残念である。皆さん、非常に勉強して居られたが、最後の仕上げの努力をして居られるのを見ると実にうらやましい。

前に述べた様な環境の外に実際の周囲の様子といふものも此処はとても良い所だし、これは相当に勉強が出来るだらうと期待して居たら、何もしないで夏休みも終りに近づいて来た。いかに環境云々した所で、いままで燈台下暗しで気がつかなかった原因が自分にあるのを見出した今は、あまりでかいことも言へない。環境だけでは、勉強もなにも出来ない。

この日記帳も残り少なくなったのに、くだらんことを書いて頁をつぶして恐縮だ。今日は人事の移動もない相だし、寄宿舎に珍らしい話題も起こらなかったのが残念だ。

あつたいくらか紙面を賑はすことも出来たのに。 (相馬)

八月十九日 (木)

今日こんなことを書いて変な日記だが、昨日遅く角田さんが歸舎した。初めて會つたの

に図々しくも部屋に押しかけて御土産の寿司を御馳走になった。泉田さん盆踊りに行ったとかで、後で残念がったでせう。

重箱一杯見る※※中に無くなって御馳走の御礼に皆至極健啖ぶりを発揮した様な訳で草地さんは、良く食ふ者は長生きするとか言って威張って居られた。

八月二十日（金）

今日は大体において晴だったが、可成り雲も多かった様だ。昼頃ぼつ※※と降って僅かに通行人の頭を濡した程度で、一寸の間だったから家の中に居た人は気がつかなかったかも知れぬ。

本日で医学部の卒業試験が終って、村上さん村瀬さん、草地さん皆満面に笑を浮べて緒居られる。如何に嬉しいことか充分に想像がつく。村瀬さんが始めてレコードをかけて居られるのを見た。明るい田園の楽しい雰囲気になぎる曲は、ベートーヴェン交響曲第六番“田園”真にこの場所に相応しいメロディーの流れの中に村瀬さん恍惚としてをられた。忽ちに大類氏の批評の種になったら、ひとしきり、さんかんな応酬がつづいて、どちらがどちらとも云へず、見物人をたのしませる。試験終了のお祝にと小母さんが晩にお汁粉をふるまった。なかなか旨いお汁粉だった。

北野さんとか来られて汁粉食ひ※※話はずんでいたが、新入生の小生には如何なる人かわからないので、明日の日記を書く人に任せやう。

今日を最後として盆踊りも終りと云ふ訳で皆出掛けた様だ。中には踊っている人もあらう。きっと賑かな事だらう。小生もこれを書いたら行くことにして盆踊りの報告は明日の人に任す。

大類、吉田両氏が市役所のアルバイトとかで、寄宿舍の附近の家を（軒並み？）に尋ねて家の建坪を調査して歩いた。相当の収入があったとみえてほく※※していた。何でも綺麗なメツチェンが居たら座り込んだとかで、どこまで話が本当だか解らない。

これを本当にしたら脅威だろう。誰かに冷かされたら、大類氏、面白いアルバイトなどで、いまだかつてお目に掛ったことがないよと云って弁解しきり。冗談はさておいて秋風らしきもの吹き初め、盆踊も終わったことだし、そろ※※手綱を引き締めにななるまいて

相馬

八月二十一日（土）

八月二十二日（日）

中田歸舎

八月二十三日（月）

辻歸舎

八月二十四日（火）

山崎、黒島、山本歸舎

八月二十五日（水）

本日より予科第二学期始まる。

八月二十六日（木）

八月二十七日（金） 晴

相変わらず快晴。ラジオの天気予報もあたらぬらしい。午後皆でピンポンを行ふ。黒島君の西瓜を御馳走になる。草地大先生一角田、河瀬大先生一角田の囲碁の各対局あり。蚊の多きには悩まされた。此れといふ天変地異も生ぜず。 角田 記

八月二十八日（土） 雨

ものすごい雨、近くで雷が落ちたらしく、地ひびきがした。夜、副舎長歸舎、お土産トウキビ。夕食にマグロのサシミ

八月二十九日（日）

本日は朝から冷え※※する。本当に初秋の感じがする。昨日の豪雨ですっかり涼しくなったのだろう。

舎生も殆んど歸舎して、残るは、中川さん、飯田さん、森田さん、三角さんだけで有る。本日の日曜日はアルバイトに出る人もなく猛勉強する人もなく、ただ皆さんぶら※※している。山本君、山崎君等は試験なので一生懸命勉強している。一寸気の毒な気もするけど一応経験することだから仕方ないだろう。

医学部を卒業されんとする方々は何となく気が楽そうである。

八月三十日（月） 晴

こゝ二、三日で、全く秋らしさがおとずれて来た。天高く馬肥ゆるの頃である。收穫物が吾々に味覚を興へる頃である。

宵口の町角で焼いているトウキビの臭は、こよなく吾人の食感に訴へる。夏の食慾減退は、この時に到って急激に回復の一途をたどるだらう。さうして物狂ほしい極点に達するに違ひない。吾々はそれを知っている。だから密かに恐れもし、又、健康の象徴を喜びもするのである。精神作用にも丁度これと似通ったことを見出すことがよくある。しかし、それは書くことをよそう。

最近頻繁に薪が盗まれるから、今夜こそ現行犯をおさへ様と相馬氏、大類氏と物置小屋に待機した。二、三時間の短い間、そして物置の限られた小範囲に吾々は色々の事件を目に見た。吾々は不思議な気もした。吾々の爲に作爲された気がした。夜には人の心理が一変する。そして、生命の欲求に奔走する真相が展開される。吾人は如何に解釈していかかわからない。唯、胸をしめ上げる苦しさを如何ともすることが出来なかった。

三角氏、長期のアルバイトから恙無く歸舎さる。土産物たんまり、五臓六腑にしみ込む心地又なし

八月三十一日（火） 晴

九月の声をきく様になると、朝夕はめっきり涼しく……寒いと言った方が良いかも知れぬが……なる。四季の輪廻は人力では如何とも仕様がな。燃料事情を考へる時恐ろし

い気さへもする。

中川さんそして昨夜来たのは知らなかったが三角さん共に元気で歸省さる。然し、三角さんは夕方、体の調子が普通でない様だった。後は森田、飯田さんが残るのみ、寄宿舎も元通り活気を取り戻すであらう。七時頃より今月の決算を行ふ。相当かかった様だ。

## 注意

日記は各人の氏名を最後に記入する事

昭和二十三年九月一日（水）

本日より開舎、夏季休暇で八月一杯、閉舎の状態になっていたのである。

舎生総員二十四名、大体全部そろった。昨夜の決算、一日食費二十円、之は七月と同様であるが、もっと普通では多額になるもの、九月よりは恐らく二十五円を出るものと思はれる。九月中の大体の予定

十日 月次会並に五十周年事業協議、これ以前に舎生の意見をまとめる。

十五日前後 舎生大会（反省と出発）

二十日頃 秋の舎生ハイキング

二十八日頃 送別会

末日頃 部屋換へ、大掃除

九月二日（木）

森田君歸舎、飯田君は昨日か、全部顔がそろった。三角君、珍らしく身体の調子がをかしいらしい。ドクトル三名が入れかわりたちかわりに容態をみている。米とパンの配給あり。平歸省——食糧の段取りをなす。

九月三日（金）

村上君の病、この所一寸落ち着いたように見へる。月曜に歸省して手術する由。坂井君、父上の札幌転勤で今月中に退舎する由。舎により大恐慌、目下後任の会計委員物色中なり。各人候補者を上げて心にとめてをかれよ。 平 記

九月四日（土）

「結果への不安、絶望、暗黒<死 ×

覚醒→その結果への冷淡、潔い別離、記憶喪失……大団

圓……」

嫌な天候であった。人間の最大のかなしみがこれかと、ふっと目をばつぶれる

—啄木—

死!!これに懂がれたくなる様な日だった。

寄宿舎には何も変わったことはなかったらしい。石炭配給意外は 第三号室 村瀬

九月五日（日）

日曜日といふ文字の意義を舎生は忘却したのか。何かこそ※※とやっている。



山本、山崎の両君は「試験」遊ぶに遊ばれぬ悲壮なジレンマに落ち込んでいる。願はくば、コンデの少きことを。芝居の募集、賞品のエッセンが今から気になる。坂井氏が退舎されることを誌上で初めて知った。脅異々々。舎生諸君次期会計委員には **cleaper** を選ぶべし 村瀬

九月六日（月）

警報機が二十一時十五分、突然鳴り出し、労働大臣を先頭に勇士が飛出した時は泥棒は居なかった相である。苦心して切った薪を持って行くとは怪しからぬ話だ。

吾々は、予科、大学と進み知識は進んで居るだろうか、あまりにも無関心ではないか。我々の生活は充実して居るだろうか。私は薪より大事な愛する舎生諸兄の胸に警報機を鳴らしたい。 竹林荘の筍

九月七日（火）

昨夜の薪泥棒のお蔭で暁よりアルバイトあり。寝ぼけ面のめん※※が眼をこすり※※働 くさまは、滑稽よりもむしろ悲愴なり。さしもの薪の大山も忽ち片附いて、ほっと物置から出ると、丁度、太陽が東の森からしづ※※と昇り出した。何と殺生なことよ！T・Y両氏は、しのめ時の餘陰に乗じてしきりにO炭を運ぶ。堂に入ったその手練に一同驚嘆す。

七時より会食があり、席上、平さんより月次会の事、又部屋替の件について話があった。次に泉田さんから明智さんよりの寄附の處分について相談があり、結局本を買ふことになる。舎でハイキングに行かうといふ案もあったが、これは否決された。最後に坂井会計委員が近々退舎されるので、今のうちに新委員を決めようと、折内、中田、宝示戸三候補を挙げ、選挙した結果、中田氏が当選した。しかし彼は固辞したので、結局、平さんにすべてを一任することにした。

九月八日（水） 曇

今日も又、漠然とした空虚に襲はれる。講義も下らなくてしょうがない。三時間目からエスケープをして、飛行場附近を散歩した。手稲が眼近に見え、赤とんぼがすい※※とんでいる。秋だなと思った。

舎に歸ると相変わらず賑か。どうも此の頃は一緒になって騒ぐ気もしない。俺もいよいよ神経衰弱になったらしい。夜、炭鑛節と共にながたびし浮かれている者あり。 大類

九月九日（木） 雨

朝より風強く、雨も交って一段と秋らしくなって来た。午後「どん底」を見に行く。一語々含蓄があつてすばらしいかった。夕方の舎は中々賑だ。試験が終はると変に勉強がしたいもので、すぐ止まらない様に努力しやうと思ふ。 (山本)

九月十日（金） 曇後晴

九月の月次会あり。六時開会、宮部先生始め高松、時田、花島、望月、北野の諸先輩及び奥田舎長の参会あり。会すこぶる盛大 弁士は、

理学部二年 泉田 扇子の話  
予科文二 河村 漱石について  
予科一 折田 トルストイについて

の三氏、終りに時田先生の米国より歸りたる日本婦人の話、かくて喝采裡に閉会。  
續いて秋の五十周年記念祭についての会合が特別室において行はれ、終って今年度秋の  
部屋換へがあった。

1. 2. 泉田、村瀬
3. 山崎、黒嶋 4. 森田、折内
5. 飯田、辻 6. 三角、相馬
7. 宝示戸、河村 8. 角田、中田
9. 吉田、山本 10. 中川、大類
11. 上野、坂井

附記、会の最初において、村瀬氏会計後任となる。十一時半頃、部屋換へによる解散ス  
トームあり、皆、モリファイ

九月十一日（土）曇

昨夜のストームで床板の掃除にはなったが壁が落ちたので、小母さんより苦情、一日中、  
部屋換へで皆落ち着きがない。

夕食に、ガンツボリユームな林檎がつく。

衣料切符配布、宝示戸氏、一週間の予定にて外泊、芦別の由。

九月十二日（日）曇

今日、飛行場の畠へ薯掘りに行く筈であったが、昨日、中川氏が下見聞に行つて、未だ  
少々速いとのことと取り止め。部屋換へまでもって\*\* 以上 中田

九月十三日（月）雨

雨ともなれば天候は不順である。そして日がどん\*\*と浸食されるが昼過ぎになると特  
に感覚されるのである。だから昼間の慌しさたらない。今日は朝から雨が降ったり止ん  
だり、気分多分に阻害され、その上時間割のコンビがなっていない。幸い市立高女で高  
校生の籠球試合が決行されるとのこと、密かにO生の来訪を待つ。案のじょう御来訪を  
受け勇躍出発した。然しその結果心の状態が非常に安定しているのを知った或る人は、  
僕等の本分を疑ふだらう。だが得る所があったと言ひ得る者に対しては、先づ自らを省  
みなければならぬだらう。

九月十四日（火）雨後晴

数日来のうっとうしい天気も朝から晴れて爽やかな秋日和りだ。三時間目より授業時間  
を貰つて、B・T案の検討をする。結局、三十三では賛成3、反対5、判らないが二十  
数名、案外無関心の者が多いのには驚いた。

夜七時半頃、けたたましい消防自動車のうなりに飛び出して見たが、何處にも火の手が  
見当らない。しかし、野次馬的な好奇心に誘惑されて、わざ\*\*現場まで出張したが最

早鎮火して白い湯気が淡く出ているだけ。とんだ骨折損のくたびれもうけだった。

(大類 記)

九月十五日(水) 快晴

やっと天気が落ち着いた。又、舎生も部屋換への興奮?から落ち着いた。近所の子供がクルミの下を探し、又、栗の梢を見上げているのをよく見かける様になった。

(中川)

九月十六日(木) 曇

五十周年記念事業費四万円の予算であるが舎史等を考へると、之でも危ぶまれる位だ。之だけの寄付を先輩に仰いでまでもこの記念行事を行ふ以上、最も有意義たらしむべく、全員努力すべきであると思ふ。舎誌、記念品等は、一部の人や先輩によって考へられるであらうが、舎生は当日の式典に関する準備等形而上下の創意工夫をこらして準備をし、宮部先生に最も喜んで頂きたいと思ふ。又、之を機会に先輩と舎を結びつけねばならぬと思ふ。二十五人の舎でなくて、二百人の舎であってほしい。私は行列を作って、舎といふ社会への門を今くぐりつゝある所を想像する。文化部、食糧部は特に腕によりをかけてもらいたい。寄附係への御協力を深謝します。

九月十七日(金) 雨、曇

朝刊は、関東、東北の大水害を伝える。

午後薯の配給四俵、辻君、折内君、吉田君、坂井、他にお客の福重大先生 遂に降り出す。ずぶぬれ、**drench to the shin**には到らず。福重、折内両氏、交代で一俵舎まで担ぐ。御苦労さん

晩飯、アンコ入りの団子、我が舎に於ては雨が降って月がかくれ様と出ようとエッセンさへあれば、“月より団子”

おや※※三角さんを始めに全員諸手が上りましたね

坂井

九月十八日(土)

六時より定例の朝のアルバイト、昨日までの雨がすっかりやんで、からりと晴れた空にすが※※しく全員でアルバイトをした。

各部屋の窓ガラスをふいたので一段と舎が明るくなった様な感じである。七時より会食をし、先づ月次会(十月)を泉田君一任とし、卒業生そうべつかいを、大体二十八日五時より開き、之も泉田君に司会をお願いした。

新入舎生(坂井君退舎後の)に就いては、一応来春まで見合はせる様に結論づけ、ついで舎生大会を二十日(火)午後五時より各部会計の整理等と行った件を中心として行ふ様になった。

五十年史も大体予定の如く運び、用紙もどうやら入手することが出来、十一月の記念祭には間に合ひそうである。寄附係の上野君、四万円を目標に励むこと物凄きものあり。現在まで二千元足らずの由、札幌は舎生が訪問する様に話が定まった。

本夕は、寮連合の方より、十数日の欠配の穴うめの配給券を貰った相な。又、南瓜の入

荷もある由。

明日、中川アルバイト部長、飛行場の芋運搬を計画す。作るのも運ぶのも大方彼一人に任せきりで、食べる丈が全舎生という事は、余り虫がよすぎるかも知れない様だ。

最近、アルバイトが何となく遊んで行はれていない様に思へてならぬ。これ丈の事位普通の家庭でも、又、下宿などでもあるものであるからもっと積極的な気持ちでやって貰い度いと思ふ。四月、五月の頃の気持をもう一度よみがへって……と言った気分にならぬ。或一つの雰囲気がさう言ったものをかもし出すのかも知れない。舎生活は、心と心との生活である。たった一つの心丈が飛離れても、じっくりゆかぬものである。特に小人数の生活では、時には無理もあるかも知れないが、家庭的にすぎる様な感、なきにしもあらずと言う所である。

河村君、本朝歸省 平 記

九月十九日（日）

秋晴れのよい天気であった。中川アルバイト部長以下四・五名、薯を運搬す。折内君歸省、三角君は羊蹄山より歸舎。夜は河村君歸舎す。日短くなり、夜は早くから舎は静かになってしまふ。私の一番好きな季節である。 (草地 記)

九月二十日

僕が諸君の所有物を奪ったとしたら、少くとも憤慨をすることは事実である。■と“一天才モッアルトの陰に百人のモッアルトが死ぬでいるのだ”といふ事を考へてみると、モッアルトは盗人であり諸君は共犯者である。我々は、彼を天才と認める必要はない。その陰のあることを認めなくてはならない。宿舎の生活を振り返ってみてみる時、我々は、天才モッアルトにならうとしてはいないだらうか。

“理智の人は行動しない”“行動によって判断されない”という奇怪な盾をもって自己を律してはいないだらうか。

自由を要求し、自由を与へようとししないのではないだらうか。反省してみよう。僕は勿論するよ。草地兄歸宅、静かになった。

第二号室 村瀬

九月二十一日（火）

秋晴の素晴らしい天気だ。眠気まなこでわからない講義をきくよりも、青空の楡の木陰の芝生の上でねころんでいる方が、余程、勉強になるやうだ。

此の秋は短い。今のうちに思ひきり大気を吸っておく事だ。異常なし

九月二十二日（水） 晴後曇

夜七時より舎生大会の名に於て会食をひらく。上野さん、医四年目、山本君以外あつまつた。先づ平さんの話の後、各部の計画及び現在の財政状態につき会計坂井さんより始り報告あり。

決定事項、一、野菜代として部費としてとっている五〇〇円を十月迄のばす事

二、文化部の超過使用ゲルを或適当な時徴収する事。その他河村さんより冬の計画につ

き次の如き提案あり、即、約千余円を各自負担し、ストーブを五個にふやす事。然し此は種々の問題ありて、討論の結果、(賛)九、(不)七、(中)三で一応否決の形となる。再、同さんより部費徴収につき質ぎありて討論したがまとまらず、次回として泉田さんに細目を依頼す。その外小さい事等決或は質問ありて閉会、十一時、ねむたし

三号室 黒島

九月二十三日(木) 晴 秋季皇霊祭

今日は祭日で学校は休であった。最近のアルバイト危機では、舎生にもあまりアルバイトに出る者は少く、大部分が寄宿舎に残り、キャッチボールをしたり、オルガンを鳴らしたり、ピンポンをしたり、又静かに讀書するなど、いろいろであった。とかく、日曜、祭日などは心が落つかず余程の計画と決心がない限り、慢然とすごしてしまいがちである。少くとも小生の場合そうであり、今日一日がそうであった。舎生の中にも休日と云はばすぐその一日のプランを立て、有効にその日を送っている人もあるらしいが、我々小人は、良くこれらの人に見習ひ、貴重な一日を何等得る所なき平凡な一日としてしまはない様今後努力したい。夕食は、おはぎであった。

九月二十四日(金) 晴後雨後曇

朝方は快適な秋晴れ、これこそ大掃除日和りと許り、4・5号室、大掃除を始む。

本日、全予科の遠足日なりしも、舎生の中出席する者少なし。参加したる者は、今日の思い掛けぬ夕立に遭遇したるべし。

夕刻、珍しく舎生に新鮮なる?烏賊の配給ありたり。爲に、刺身に舌鼓みを打つもの、塩辛らに漬けるもの等、色々と各自の腕を振っての調理に炊事場大盛況を極めたり。

村上さん、スタッツヘモロイダアリウスースタツスノルマリスの手術し終へられ、十八日振りに歸舎する。村上さんの入院中、経過が順調で、意外に早く歸られることが出来、送別会(28日)に参加され得ることを心から欣幸に思う次第。

黒島君外泊、三角さん臨海実験の爲 へ御出張。

九月二十五日(土) 朝雨後晴

本朝六時半、全員起床、七時會食後、二十二日舎生大会以来懸案の冬季燃料対策、食糧対策に就き、更に關係舎生の精細なる説明あり。こゝに可決される。

- 1、舎生四人に一個の割の五個のストーブ取付の件
- 2、石炭の月別消費割り積算(泉田生に依る)
- 3、主食、副食野菜(但現金購入費たるストーブの分の月別消費割精算(吉田生に依る))

河瀬兄朝元気に歸舎する。三角、山本歸舎

四号室 森田 記

九月二十六日(日) 雨

朝からの雨で気温下り、ガンツ寒し。しかれども女学校へ行くもの、ピンポンをする者有りて静かならず。だん※※と風雨ひどくなれども、競馬場行きの自動車、数多く通れり。午後からは、かるたを取る人達、オルガンをならす人達も数多くいて非常に楽しそ

うである。

終日寒し、段々冬来る感じあり。夜になれども依然として雨止まず。 五号室 辻

九月二十七日（月） 時々俄雨

平澤自白す。ラジオは、平澤に関する事多し、然弁護士は法廷に於て自信あり、確信を持つと云ふ。この寒さに、辻、山本映画“ターザン”を見に出かける。雷がしきりに鳴る。 五号 I

九月二十八日（火） 時々雨

本日、草地、河瀬、村上の三氏の送別会舉行さる。宮部先生を初め亀井、奥田、時田、望月、北野等諸先生、先輩の御来場を得て甚だ盛大に行はれた。

なごやかな会食の後に、大類、中川、平の三氏、舎生を代表して卒業を祝し、また、送別の辞を述べる。各々幾年を此の寄宿舎に共に暮し、共に語り、共に学んだ深い深い思い出に満ちた述懐がしみ※※と胸を打ち、まだ入舎して日浅い自分にとっても、眞に感慨無量であった。終つて先輩方が銘々祝詞を述べられ、三氏の一層の奮闘と幸福を祈つて激励されるや、河瀬さん、草地さん、村上さん次々と立って、懐かしい者生活を憶ひ起し別を惜まれた。宮部先生の心からの飾りのない眞心籠った激励の言葉と三氏に贈られたゆかしい訓しの筆文に傍見る我々まで感激の念にかられた。きっと三氏は座右の銘として、それを人生の秋として進まれる事せう。

優秀な三先輩を一度に此の舎から送り出さねばならない我々は、誰かの送別の辞にもあつた通り、船の舵か、水先案内人を失つた様な有様ですが、これから先、社会といふ遙かに大きい船を導いて行かねばならない尊い大きな使命を持つ三氏の前途に限りない激励をおくと共に、この舎と云ふ小さい舟を残つた我々が受け継いで、古い歴史をもつ舎を代々受け傳へて來つた先輩の如く、敢然として引き受け、徒らに別れを惜しむばかりでなく、以上の様な意味で我々はお祝を述べて波荒い社会への雄々しい一歩を讃へませう。

さて愈々演芸大会の幕は切つて落とされ、先づ、森田、黒島、山崎、村瀬四氏による“父歸る”名優の面々、笑をかみ殺して悲劇ぶる。見物人、げら※※甚だ思いやがない。中で一きわ森田氏の演技光つて、ほろりとさせる。

次は、漱石の取材による“坊ちゃん”主人公当直の夜の大騒動、河村氏大衆の面前で大暴れ、バツタだかイナゴだかを叩き殺してしきりにごみをたてる。角田さんの小使いさん中々堂に入ったもの、さすがはと皆感心。

更に舞台は變つて三番目、儂い、初恋に悩む美目秀麗の美青年泉田氏、思はぬ奇遇と数奇なめぐり合せに感無量に若き頃を回想する平氏、喫茶店の綺麗なメツチェン折内嬢、青年、野次馬に目もくれず、心から紳士に恋を打ち明ければ、紳士、見物に背を向けて動かず、メツチェン店内をのそりのそり、砂糖水らしきものをしきりにお客にすゝめる。舞台装置中々上手。

第四幕、或る貧乏村の村長、飯田氏の見事な執務ぶり、別名 小平の吉田氏、ヨウカン

を見物の面々の前でむしゃ※※食べ出して口惜しがらず。平沢にも似たる辻氏、堂々と平沢の姓を名乗って村役場を襲ったかに見えたが、息子良作の縁結び、やはり帝銀魔でも親ですなあ。実直そうな山本氏の小使いさん、良い小使だなと思ったら吉田事務員のヨウカンを物陰からねだって、とう※※ものにしていた。

さて、愈々当夜の大傑作、新編鬼ヶ島、堂々二幕に互る長編、熱演また熱演、そのユーモアと機智とカイギャクと比喻の素晴らしさ、遂に投票の結果、圧倒的多数六票をもって一位、あとの“父歸る”“坊ちゃん”“村役場”を夫々一票におさへて見事勇将、老巧、新鋭の面々は次の通り、

桃太郎、中川氏、犬、大類氏、猿、坂井氏、赤鬼（大將）上野氏、黒鬼、三角氏、青鬼、相馬氏、各々適役であるとの評なり。

尚、特別出演は、第三、四の芝居の間に、題して“煙草屋の娘”なるラヴ・ダンスあり、河村氏唄につれてしげ※※と中田嬢のもとに煙草買いに通ふ。金の工面に一苦角田氏、宝示戸氏交代で唄ふ。面白く上手で評判良し。

ところがだ。個人賞を狙ふ河村チームに大敵現はれ出たのであったのであった。眞に本演芸会の末尾を飾る名演技、見事演技賞をかつさらった吉田氏の蠅の躍り、かの有名な“ひん死の白鳥”にも劣らない“ひん死の便所蠅”見事な水々しい感覚をもって演じた彼に拍手の嵐鳴りやまず。賞品授与式に意気揚々として頂戴に及んだ吉田氏、さすがに嬉しさう。それにも増して快哉を叫んだのは、鬼ヶ島出演の面々、桃太郎も緒にも賞品のエッセンを前に意気投合、仲よくエッセンを食った。

見物は舎生の外に河瀬さんのお母さんが来られて、授業ならぬ舎生の熱演を参観せられた。

かくて、本日の演芸大会は成功裡にその幕を閉じたのであるが、一番最後に上野さんの詩の朗讀あり、先程の鬼とは打って変って熱烈な口調で、一言一句、情熱に満ちて朗讀された。楽しく過した今日を、この詩によって明日の構を作って、かくて一日は終わったのである。

（相馬）

九月二十九日（水）

本日は一日さぼってしまった。日向でねむっていた。午後ピンポン、晩エッセン、ああ何とも言へぬ習慣だ。三先輩最後の晩、コンパと稱して食ふ。諸兄の前途開かれん事を。

三角

九月三十日（木）

本日河瀬さん国立病院へ移転、相当きたなき所なり。寄宿舍の延長の様な気分あるやも知れず。夜、街を歩く。秋なり。

十月一日（金） 曇

中田歸省す。寒さ日に増し、夜は勉強もだん※※つらくなる。

十月二日（土） 夜明け方雨後晴

土曜日朝、例の如くアルバイトと思って速く寝たが、暁ともなれば幸か不幸か雨降り来

り、アルバイトは取り止めとなる。お蔭で八時迄ねて了った。

五十周年記念祝典もあと一ヶ月に迫って来た。舎内外の取片付けやら冬籠りの用意等もそろ※※始めにやならんと思ふのに、雨に降られて、一寸消耗

十月三日（日） 快晴

朝、平さんとカンチャンのムクレ声に驚き時計を見れば、早や正午を過ぎる三十分。午後、カンチャンのミシン台取りに一緒に行く。夕方よりカンチャン生命より二番目のエッセンスへ忘れて、ミシン一生懸命にやる。小母さんと平さん、三吉神社の舞踊見に行く。

十月四日（月）

山本歸省、火事手傳の由、河村君ひねもすミシンにつききり、いくらか上達の見込み。近くかん板でも掲げねばなるまい

十月五日（火）

山野が紅葉し始めた。風の一吹毎に木の葉が宙に舞っている。薪割の音がいやに身にしみる。多忙の中にも放心した面持すべてが寂莫で形取っている。これが今頃だ。

舎に事なし。河村君、ミシンに大童

十月六日（水）

恵迪寮に野菜の申込みに行く。生産者価格で購入の見込、野菜の買ひつけがすめば、寄宿舎もやっと今年は送りこまれるわけだ。

十月七日（木） 曇後晴

秋らしい静かな一日、山が次第に紅葉してくる。パン配給、一人三ヶ。

十月八日（金） 快晴

早朝より恒例のアルバイトあり。朝の冷氣殊更に身にしむ。会食の際、中川さんより明年の農耕の計画について、又、泉田さんより卒業生への寄せ書について、御講話あり。夕方、アルバイトより歸へると舎の前に仮小舎がたっていた。そろ※※ふしんするのならん。

十月九日（土） 晴

対高商戦（ラグビー、野球、軟庭負、卓球、排球、端艇、蹴球勝）

舎生も一日応援ニ出テ御苦勞サン、森田、山崎、中川アルバイトニ行ク。村上サン本日退舎サレルトノ事

十月十日（日） 薄曇

昨日に引続き大学祭。舎の皆さん、御案内に御見物に相当御忙しさうだった。

天気も快適、エルムの学園は、一日中賑はう。ずいぶんこんだ所もありました。泉田さん、宝示戸さん説明に大童、北野さんも得意の古狸の智慧でもって得々と御説明とてもお上手。村上さん本日退舎、さようなら

十月十一日（月） 曇

大学祭も済んでほっと一息、一日中ぶらり※※、上野さん、山本君歸舎。三角さん三笠



まで、寛ちゃん、中田君外泊。

夕食するこ、“今月一杯もう作りませんよ”をばさん

十月十二日（火） 曇

早朝、遂に角田さん、黒嶋君歸舎、滑込みセーフ。さぞおっばいを沢山飲んだのでせう。

四日の休がついに終って又学校、どなたもやれ※※といった顔、“最初から六時間ぶつづけ”なんてふくれているのは誰ですか？

坂井 記

十月十三日（水） 曇後雨

すっかり秋になった。舎の前の建築も準備が進んでいる。明日より解剖実習が始まる。

急に出席人員が倍加する。寄附がやっと一万円を突破した。まだ前途ほど遠しである。

上野 記

十月十四日（木）

別に特記することなし。お米の配給が久し振りにあったのみ。寒さが一段と身にこたへる様になって来た。

十月十五日（金）

五時より月次会を開く。参加者、奥田、高松、青木、時田の四名。

1. 辻君のフランス革命について
2. 飯田君のチャイコフスキーのバイオリンコンチェルト
3. 宝示戸君の農業の話

何れも物凄い熱演ぶりで、二十分の制限時間を何れも超過、特に飯田君は一時間に〇んとする 長時間で、途中停電などがあつたが、よくまとまっていた。

月次会の話が段々と上手になってゆき、内容そのものも上昇して行っている様に思はれる。

終って特別室で、五十周年記念事業の委員会を開き、具体的に定めた。

十月十六日（土）

朝七時より会食、そして昨夜の五十周年の具体的に決定をみた事業につき報告あり。

各部、各係りより、夫々祝典準備に対する内容の話があり、各舎生の協力を要望す。

1. 角田君より内容の説明、各係の委託
2. 吉田君より祝賀晩餐会の内容につき
3. 泉田君より余興の具体的のものについて（劇、合唱）

午後、小母さん角田へ旅行、十九日に歸る予定、それまでの食事は、舎生が交代でつくる事とする。中津氏来舎、夜泊られる。

十月十七日（日） 快晴後雨

大類君指揮の下に丸太運びをする。夜停電終につかず。中津氏泊られる。

十月十八日（月）

終日雨、相当な寒さ身にこたへる。夕飯は豪勢なテンブラ、テンブラ中毒者の狂歌続く

こと数時間 (草地 記)

十月十九日 (火)

草地氏、遂に退舎。数年間の長いそして短い舎生活の幕を閉づ。晩めしのおかず、細川のおばさん作ってくれる。ここに感激の意を表す。河村君歸省。

十月二十日 (水)

小母さん本日歸舎、ホッとした。食後、ドレミファソラシトレミキーカスの音が響く。広場に建つ家のツチの音が消えたと思ったのに緑の広場が無くなるのは、全く淋しい。木上の月は冴えて美しい。 一村瀬一

十月二十一日 (木) 晴

早くも十月も下旬となる。これからは寒くなるばかりと思へば全く脅威。然し、戦地の兵隊さんを思ふ時ぢゃない。シベリヤの同胞を思ふ時……

夜は安全器を外して、電気がつかないと騒ぐ。それにしても、近頃の停電の多い事には迷惑だ。記念祭も近づき、合唱の練習始まる。第一テノール、第一バスなど一応音楽家らしく見える。皆熱心にやっていた。

ムー ジイ カ (しい) 黒島

十月二十二日 (金) 晴れたり曇ったり

最近、又、寄宿舍の薪がアタックされると云ふので、昨夜十一時近く迄番をしていたが、遂に未発見に終わったらしい。

夕方、味ソ漬のニシンが配給になり、夜には早速試食とばかり、一種独特な臭がしてくる。夜は、又、例の合唱練習す。山崎記

十月二十三日 (土)

今日は国体北海道代表が福岡に向かひ、五時二十五分 (pm) 札幌駅を立った。唯、吾々は彼等の奮闘を待つや大である。

寒さは日に加はる。そろ※※ストーブに親しむ舎生も多くなった。今日の五号室に於ける温度計は十度を示している。これより下らぬ様にしたいが N.T

十月二十四日 (日)

気温低く、けれども朝から好天気、こんな天気は、後幾日あるだろう。冬も、もう目前なのだ。天気が続く事を願ふ。

大類氏は、山へ行った様で、その外の人も皆外出した。

横に建っている家は段々仕事ははかどって行く様だ。夜は、オルガン、ヴァイオリン、レコード、誠にはなやかにして終始せり。

気温は、相変らず寒く低くして+10° なり。

夜は、本当に冷え※※するを感ずるなり。

十一月三日、刻々に近づく様であるが、皆様、準備は良いか。 一五号室 辻一

十月二十五日（月）

昨日とは打って変って■にしみ透る冷たさ寒さ。気まぐれな秋の移り行きの日。唇を紫色にし、身をすくませて、破れたマントの襟を掻き合はす。授業中でも、談話中でも頭の片隅にきつと“寒い”の感じがつきまとふ。休講になってほっとして下駄を冷い秋雨に寒々とうたせて、赤くなった素足に引きづりながら、足の運びももとかしく、冷い手をポケットの中に暖めながら急ぎ歸る。道行く人、話もせず、齒をかみしめて首をちぢめる。寄宿舎に歸ると叔母さんが火を燃して呉れる。早速ストーブにしがみつき、離れんとして離れられず。

エッセンを食ひ、腹充ち、暖まって、漸く口綻びる。追々火の周り暖を楽しむ連中で塞る。暖い所では話しがはずむ。今日は小母さんの二十年前の知人の尋ね来り、今更の如く過ぎしふた昔を追憶をしてとのことなり。お互に年取った自分達が変に思はれるとの事。寒い秋の此の日、寒さうな話を温いストーブの傍で案外暖かそうに話す。

三角氏、アルバイトの序に東京に歸る。そのアルバイトによって得た金で肉を買ってきて振舞ひ、リュツサックに洗濯物を一ぱいつめ、南瓜を御土産に舎生五・六人に送られ、山にでも行く様な気軽さで意気揚々と 出発、山に行く様な格好で。

河瀬さん久し振りに遊びに来られる。今晚舎におとまり。何でも河瀬さんの患者が重態で、輸血の必要あるとのこと。どなたか血を買ひますよ！

今日は米の配給があつたが、取りに行った人達は、いつもの様に行列が長いからとて歸って来たが、後から又行ったのでせう。

新聞に玄米らしいことが書いてあつたが、今日のは何だか聞くのが面倒くさいから書きません。

ところで、周囲の建築中の家は、どん※※進捗して次から次へと組み立てられて行くのが妙にせわしく、おし迫った冬を前に小刻みな槌の音が冷い小雨と共にあわだたく自分の心をしめつける。あわてろ!!あわてろ!! (相馬)

十月二十六日（火）

夜、停電す。此頃、ちょい※※電気が切れるので、一度電気屋に直してもらはねばならない。

十月二十七日（水）

山が半分(上の方)白くなりました。美しい紅葉の山をもう少し良く見ておくのでした。未だ※※とと思っている間に冬の来るのは早いものです。皆さん風邪ひかぬやう御要心。今夜もストーブの周りで歌の練習、これをしもコーラスを云ふか！唱っている人は良い気なもの、さあもっと「お口を揃へて…」。聞かされる立場にならなかつた事を感謝するのみ。——七号 **hojito**

十月二十八日（木） 晴

今日は少し許り良い天気。愈々冬の用意。大根二百貫、恵迪寮へ取りに行く、夕食後來る三日に控えた記念祭の食事について、平、角田、吉田、キヨ子の諸氏、取り決めに気

炎高く頼もしき限り。遇々時田先生、同祭の魚についての報もたらされる。

十月二十九日（金） 晴

今日も相変わらずストーブの主が四・五名、昼前から離れない。朝方は地面が凍りついたらしい。そろ々※※寒い※※冬がやって来そうだ。記念祭もあと四・五日忙しい。

夜間ピンポン久方振りに復活。

平さん、吉田君、ケーキの検定に出向く。合唱練習あり、「俺は夕飯食べたろうか、どうだったろう」と泉田さんも一寸疲れませんか？

十月三十日（土） 晴

冬を控えては何事にも忙殺される。今後も野菜が恵迪寮から入手出来るが、運搬には総動員しなければなるまい。さしより先日は大根二百貫を水産科の荷車で運んだが大した労働だった。今日は、飯田氏、河村氏、吉田氏と人参、カブをとりに行く心算である。

記念祭も刻々迫る。用意は如何。

十月三十一日（日） 晴

頻りにアルバイトに動員されるせいか、学校へ出かける者多し。午後になっても人影を見ない。困ったものだ。今日は決算だが、決算毎に高騰して行く舎費には、愛そが尽きる。

十一月一日（月） 晴

記念祭準備に大忙である。キヨ子氏も忙しそう。中川、中田、辻の三諸氏は、岩見澤へ、米、小豆をとり午後から出かく。夜最後のコーラスの練習をやったが、最後と思ふと不安がつき纏ふ。その後、岩見澤の三氏を出迎へに駅迄行く。いよ※記念祭だといふ感が深い。

十一月二日（火） 晴

謝生活も今や記念祭準備の一色に塗りつぶされている。用意は萬端である。細川のをばさんキヨ子氏の姪二人の援せいを仰ぐ。

明朝は六時起床のよし。落ち着かない気持で早く床に着いた。

十一月三日（水） 曇後雨

文化の日、開道八十年記念の日、而して、我が舎の五十周年記念祭の日に当り、極めて意義深い。予定通り六時起床し、会場準備にとりかゝった。午後二時頃には大体完了した模様、来客を待つばかりとなる。三時半開会し、式次第に則って式典を進めた。

司会者は角田氏である。宮部先生始め来客は十数名だった。祝辞は、平、村瀬、北野、奥田、河村、逢坂諸氏、宮部先生の順に従って行はれ、感慨一汐深いものがあつた。

途中、写真部の都合によって記念撮映を行う。宮部先生記念品贈呈の後、小休止、会食に移った。

献立は素晴しかった。かつて、平、角田諸氏と頭を練りに練った原案だと思ふと目に痛い味もすこぶる妙を得ていた。

テーブルスピーチは、飯田、上野、村上、中島、上野（九部）諸氏にお願ひした。放談

といふ形で實に面白く聞けた。特に先輩の談話には、今昔相通ずる所に思はず爆笑することもあった。

晩さん終了後、次いで演劇に移った。大方の先輩諸氏は、都合のため退場されたが、宮部先生数名御観覧を願ふことが出来た。

演劇は、終始愉快に尽きたと思ふ。平氏の舞踊には唾然とした。宮部先生は大いに気に召されたそうである。仲々金のかかったものであらう。

「S博士のテレビジョン実験室」は、着想が素晴らしいと言ふか、思考の徹底せるためか舌を捲く程であった。上野、中川氏の一挙手一投足は腸をよじらせた。寺田寅彦は影絵にある見方をした様に、実に驚嘆に値するものだ。「学生かたぎ」も好評だった。

団体劇では「S博士…」、個人劇では、小生が先輩の得点を獲得出来た。かくして愉快裏に演劇を終了し、次いで三次会に移ったが、この時は皆食欲も飽和に達したらしい。しかし、中には例外もいる。山崎氏は黙々と健たん振りを示していた。たのもし!!

泉田氏の誘導で遊戯をやる。夜のふけるのも忘れていた。床につく頃は十二時半か。

朝六時から緊張、興奮は、脈々として今更にさめやらない。舎生皆そうであらう。床の中で回想しては感慨交々に違ひない。

吉田 記

十一月四日（木） 曇

六時半起床、朝はお汁粉であった。作日の沢山の御馳走も早やどこかに消えて、もりもりお汁粉を食べた。それからそれ※※手分けして記念祭の後始末をする。僕は、植物園の花をかへしに行く。雨上りの朝の植物園は、大変気持が良い。登校前にすっかりかたずきほっとした。

午後、ストーブを取りつける。屋根へ上ったり下りたり、さん※※苦心してやっつけた。中々、何事もむずかしいものだ。

山本 記

十一月五日（金） 晴

本日は雲一つ無い良い天気だ。記念祭が終って、皆ほっとしている。ヒイちゃんの病気も良くなった。午後、角田氏、折内氏とお米の配給を率先して取りに行く。案外混んでいなかったのに一時間もかかった。皆は、公民館へ映画と音楽があるので、行ったのを聞き、入場料無料が魅力で行ったら舞踊であった。日本舞踊よりもやはりダンスの方が我々にはしっくりする。白鳥の死を思い出した入場者は女性が多かったので、角田氏さかんにキマリワルガッテイタ。そんな心臓ではいけませんぞ。 山本 記

十一月六日（土） 曇

十一月にしては割に暖か。平氏、辻君歸省外に変わったことなし。予科生、そろ※※試験勉強にとりかゝった模様。

朝、会食 十一号室 坂井 記

十一月七日（日） 晴

日曜日、即、寝てよう日、ぐう※※※※。

飯田氏歸省、辻君歸舎、晩、十二号室の諸君、大分御機嫌

十一月八日（月） 曇時々雪

遂に初雪。寒い※※。石炭特配。平氏歸舎。

今日は寒いせいか皆さんお寝坊さん。をばさんに起され時計を見てびっくり、意外な時に洗面所賑はふ。記者もその一人かも知れません。 坂井 記

十一月九日（火） 曇時々降雪

今朝の寒さは全く意外、洗面所の水がめに結氷あり。昼休みに歸舎の面々悉く震へあがれり。だがこの寒天を付いて、ファンの方々は、マ元帥推奨の **State Fair** 観覧に出掛けた模様。さて、ふりかえって時局の様相如何。四月末の東裁における判決言渡し。

かつての旧日本帝国を代表した東條被告以下二十数名の裁断が迫りつゝある。將に旧日本の糾弾であり、我々過去の反省剤である。毎日の新聞に載せられてある被告の顔を見る度に複雑な感慨が湧くのを覚える。偽善、欺瞞の過去よ、葬り去られよ。そして眞実の世界を開こうではないか。追記 試験準備に熱中の精か、各部屋深更まで起きて、燃料消費聊か繁し。本日も予定外の石炭配給をす。

十一月十日（水） 雪時々曇

終日雪がちら※※降って、寒気甚し。このままでいったら一月はどの位寒くなるか判らない。厳寒に備へて石炭を出来るだけ節約されんことを切望致します。

予科試験日割発表さる。最後の試験（来年は学チンですぞ）と思ふと些か淋しくないこともない。有終の美を發揮する覚悟。

なんて、ドッペルかもしれないとお笑の方もあるでせうが

夜、テンプラ、ひさしぶりに食って、眼玉がぎよろ※※する。

十一月十一日（木） 曇割合ニ暖イ

記祭終り、シカモ冬休ハ未ダト云フ今日此頃、皆氣ノ抜ケタ顔ヲシテフラ※※シテイル。寒サト共ニ床勉ノ權威、ボイラーノボス等夫々本領ヲ發揮シ初メタ。

M氏ハ1号ト12号ノ鴨居ニ鉄棒ヲ渡シテ毎日鉄棒ヲヤツテイル。大類氏本日歸省 F.N

十一月十二日（金） 曇

初雪もすっかり消え、寒さもぐっと穏かになって、“冬へ※※”と一目散に急ぐかに見えた季節の動きも、昨日、今日足踏みの状態、ほっとして僅かの心の落ち着を得た人々は、来るべき本格的の冬将軍の猛威に備へて最後の仕上げをしようとして、此のほのかな暖気を利用するのに忙しい。

他の家々と同じ様に此の寄宿舎も又、遅れた大根を早く漬けてしまはなければならないし、便所の溜りを空にしなくてはならない。来年の畑の準備に耕して置くために、明日早朝のアルバイト計画の一部にそれを入れなければならないし、薪の補充といふ一項も織り込まれることにもなる。嬉しそうにスキーの手入れをする人もあるかと思ふと、苦い顔をして学期末試験の勉強をしている人も出初める。荒れ狂ふ厳冬の前の季節の小休

止の間に、多くの人々は、夏の活動の最後の名残を惜むのに忙しい。冬休みになれば歸省する人が殆んどである。寄宿舎もきっと淋しい冬枯の様相を呈するに違ひない。しかし、若い元気な舎生の皆さんは、各々在る所で此の冬を夏の活動の延長として大いに活発に過されることも又確かだ。頼もしいことには、舎にはスケートの権威U氏、スキーのT氏……等々権威揃ひであること。其の他自称名人、あまた存在することで、きっとウインタースポーツの華を咲かせることでせう。冬休を出来るだけ有効に使ひたいと思ふのは誰しもでせう。そして又、出来るだけ愉快に明るく過したいと思ふのも同じでせう。

深更に至った今宵、各部屋勉強に一生懸命だ。本日遂に行はれた東京裁判の判決言ひ渡しの実況放送を聞いた。諸君も非常に感慨深げな面持だったが、各々種々の想ひを胸に秘めて多くを語らなかつた。人の気持を推察することは止めにしておかう。唯、各人、考へる様に考へるだけで良い。

ストーブが良くてつい※※夜更しをする。

体をこわさない様自分自身の健康に注意することが何より大切。

人事異動なし (相馬)

十一月十三日 (土)

朝六時半より、本年最終の定例アルバイトを中川部長の指揮下で行ふ。冬の用意の爲の種々の事をする。終了後、七時より会食  
その折、左の事項を取決める。

- 1、本月の月次会に就て (上野君司会→山本、森田、相馬、中川四名の予定)
- 2、本月より部費五百円の値上は、一応中止する旨、発表あり
- 3、不〇収入三千元にて協議の結果、レコード購入に決す。その委員として、泉田、飯田、相馬の三君を推す。
- 4、煙筒掃除 (四日に各部屋ストーブを取付けること) を一週一度の割合でするよう注意あり。

十一月十四日 (日)

日曜日、ねて曜日で過す者以外に多し。

朝、舎の片附いたのは、十一時近く、朝よりアルバイトをする者多し。煙筒掃除、屋根の雪よけ取付け等、今日は小母さんとダリアのイモを取り、いける。来年はもっと拡充する予定。

ピンポン朝より盛、中でも角田、中田、河村の三君の進境いちじるしい。三角君の域までは、まだ※※であるが。

ストーブ取付けてから勉強、どの部屋も盛の様である。今迄考へられ恐れられていたものが全然ない。勿論予科の試験が十日に迫っている事もあづかつて大きいとは思ふが。

大類君歸舎す。森田君外泊 平 記

十一月十五日 (月)

予科試験も一週間後に迫り皆さん勉強中、が一時に勉強も終らなければならないので適当な睡眠が出来○こう

森田さん外泊の外変った事なし

十一月十六日（火）

風呂から歸ってレコードを聞く。眠気五体に満つ。予科最後の試験ではある。レポートの題「思想と社会」考へない事もないがとにかく実社会との関係と思想は持つものであり社会はその導く根本の思潮によって動く、こんな事だけ書いたんぢや何で書いたんだか判らないだろうが忙しいせいにしてやめる。

村上さん来る。卒業生の頭に浮ぶ事多い。

人間気分に身体等の物的條件に占むるところ多し。或る状態にては何もしないで寝ているにしかず。空っぽな頭は学校だけで一杯になるだらうか。

（三角）

十一月十七日（水）

午前中は良い天気だったが午後から風が吹き出し、夕方近くなって再び止む。予科の冬休が決ったとの事で、予科生間に一応安心の色が見えた。又、新制大学は、明年九月迄開校されないとか……曰ク（二）鈍才（一）

「快調！」森田さん歸舎さる。

十一月十八日（木） 快晴

久し振りの晴天。朝冷える。降霜す。雪未だ来らず。予科冬季休校が十二月一日ときまる。第二学期試験を数日後に控え、本年度のしめくゝり、又、来年度の新学制への出発等舎生○○○○努力の方向にあり。

予科アルバイト免除。

十一月十九日（金）

雪が降りそうで仲々降らない。今日も全く雲って来て今にも降る様に見えたが絶対に降らなかった。

此の頃は朝から晩一時頃迄、皆さん日頃の不勉強がたたったと見えて、一生懸命試験の準備に余念が無い。しかし、昨日から早く停電になるらしいので、皆さん大弱りの様子、すい星が朝見えるそうですが、誰か張切って朝起きて見られる方は有りませんか。図書館で勉強される方は今（六時）歸って来られた。現在の様子から推して、試験が終れば天にと云ふ感じです。

十一月二十日（土）

ノルマルの土曜日なら嬉しいのだけれど、アブノルマルでは、淋しそうな顔、ムクレタ様な顔、悲壮な顔もずらりと並び、学生生活に唯一つだけこれがなければ如何に楽しいものかと思ってみる。あと一週間たてば冬休み。会食があったけれど、何をしゃべっていたのか忘れてしまった。（村瀬）

十一月二十一日（日）



あたたかい日だ。ここ二、三日はれた良い天気。今晚は十時半頃停電になって試験組は悲鳴をあげている。別に書くことはない。

お休み。 N・I

十一月二十二日（月）

平 歸舎。試験いよ※※近づく。長い休みに対する期待とその前の試験の苦痛とをともどもにいだいて予科生諸君大奮闘。

十一月二十三日（火）

明日から予科生の試験開始、最後の追込に大奮闘。ゆう※※（但し二種あり）てんてこまひ。局外生は、横目でのんびり、うらゝに晴れた秋の日

十一月二十四日（水）

いよ※※試験始る。夕方暖かい雨が降る。

十一月二十五日（木） 雨後曇時々雨

十一月もそろ※※末といふのに今朝は時ならぬ雨が相当に降っていた。学校に行き度く無い気分誘はれたが思い直して遅ればせ乍ら玄関に出てみると幸なるかな!!雨は止んでいた。予科の試験も今日は二日目、アチコチでスッタスッタの連発。然し皆、案外明るい顔？午後飯田先生と炭の配給を取りに行く。横なぐりのみぞれに少々へこたれた。夜ともなれば時折轟く電車の響、犬の遠吠えを除いては、舎内はヒッソリ皆さんの猛勉強振りが偲ばれる。北野さん来舎さる。誰か鉄棒から落ちたらしい。その他別段変わった事もなし。

十一月二十六日（金）

昨夜市内各所に兇悪事件発生。皆さん気をつけて下さい。予科の試験も今夜で最後の頑張り。電気が消えませんかやうに。

十一月二十七日（土） 晴

本日、試験終了。ほっと一息の形。さすがに暢気の気舎内にみなぎる。山本君歸省、第一陣、お次は誰、誰がおっぱい飲みたいと顔に書いてあるかな。夜、案外静かですね。ヴァイオリン例の如し。

十一月二十八日（日） 晴

張切った後に来ってくる放心した状態が今朝誰の顔にも窺はれる。何に手を着けていゝかわからないのが本当だらう。都合により小生朝九時にて旅行しなければならぬ。今日一日何事もなからん事を祈る。

十一月二十九日（月）

本日、月次会

一、学問論……山崎君

二、現代のヒューマニズム……森田君

三、二つの農業……中川君

山崎君は、福澤諭吉の「学問のすゝめ」から河合榮次へと論をすゝ（空白はあとでうず

めます)

森田君は、ヒューマニズムの歴史を説き、現代ヒューマニズムは、社会民主主義の形態を取るべきである。

中川君は、米国の農業は商品の爲であり、日本の農業は必需品であるということより三君は、中々の研究で、後の質問にもよく答へられた様です。ディスカッションが毎回あると月次会の愉しみも増すことでせう。

先輩諸兄が来られなかったのは残念といひたいが、良かったといった方が真に近い。

十一月三十日（火）

舎費最高 一千二百円、部費がなくなって幸ひなるかな。ボツ※※故郷へ歸られる人がふえてきた。二月に皆歸ってくればよいが心配だ。解散コンパ!!肉飯!!カルタ取り!!宝示戸兄、中川兄、歸省。大類兄も亦

十二月一日（水）

石炭十屯入荷、いささか消耗。歸った人がうらめしい。吉田兄、森田兄、山崎兄歸省、辻兄も亦

十二月二日（木）

村瀬君のお父さん来る。おばさん風邪を引いてノドが痛いといっていた。珍らしく角田氏もやられて変な声を出している。これで一通り舎生にカゼが廻ったやうだ。隣室から相変わらず黒島先生のトレモランドウの声がきこへる。

十二月三日（金）

夜、カルタ取りのにぎやかな声きこゆ。

異状なし

十二月四日（土） 曇

先日の雪も何處へやら？道路は汚い事はなはだしい。自動車を見るとすぐに逃避行に移る。先日アメリカ兵が日本の車に泥をかけられ怒り出したのを思い出しておかしくなる。彼等の顔を見ると、皆が悪人の様に見えて仕様がな。此の間の事件以来、寄宿舍も次第に人数がへり、十二・三人となる。今日は又、坂井さんが、彼の言ふ如く乳（オッパイ）を求めて歸省する。二十日過ぎると大部分かへるのであらう。それにしても遠く内地迄歸る人は、全く御苦労さんです。

黒島 記

十二月五日（日） 雪後晴

「カンチャンが煙突掃除するし、三角さんが朝風呂へ行くし、一体今日はどんな天気になるんだらう」といふ小母さんの声が耳に入った。時計を見て又ウツラ※※目を開けてみたら十時少し前であった。成程今日は天気が少し変で、チラ※※降っている。子供達は喜んで裏のスロープで滑っている。十二時半頃からウドンを作って食ふ。皆の食べる

には驚いた。ピンポンを少しやる。それから平和館迄出張してウイナ物語を観に行く。  
仲々好かった。舎には別段変わった事もなく、夜は深々と更けて行く。角田記

十二月六日（月）

朝、目を覚すと、純白の雪万物を被ひ、さながらに北国の冬といふ感じが漲って居た。  
いよ※※冬が来たのだ。そうだ、スキーにスケートに囲炉裏のモチ焼に、北方特有の郷  
愁のたゞよふ冬が来たのだ。

十二月七日（火） 雪

前日の当番異状日記を怠慢して今日の分を書いている。仲々の名文で、何も付け足す事  
はなし。彼にかわりて六日の日記を記す。

相変らずの天気、何時になったら冬が来る事だらう。朝僅かに路上の凍れるに冬らしさ  
を感じ。七号室マージャン常に変わらず。

其の他記す程の事は無し。夜に入り白魔舞ふ。

附記七日夜七号室にて角田氏歸省送るの大コンパ。

昼、吹雪の合間をみて、奥方彼氏を同伴（これなん平氏）■の舞踊に出掛く。

十二月八日（水）

昨日の大降雪に除雪車大童、子等は楽しそう。角田氏歸省 以上  
七号にて 中田

十二月九日（木）

平静（怠慢）なる一日を過したり。明日よりの合宿心うき※※。でも支度は未だ全然、  
あわててみても、ゲルなし、物なし、頭なしで、眼前をのみ糊塗して又出発間際にあわ  
てる事ならん。除雪のアルバイトにより寄宿舍アルバイト戦線もやうやく安定感を得。

（三角）

十二月十日（金） 曇、風甚だ強し、（午前中は特に冷い風が吹きました）

十日と言へば昨日の事で、今日は十一日、怠慢した訳ではありません、停電の故です。  
昨日は何があったか覚えて居りません。何しろ泉田氏、黒島氏、折内氏等と除雪のアル  
バイトをやって来たんですから。歸ってから尋ねたら別に変った事がない相で、書く事  
がなくて困ったなと思つたら、ばたばた騒いでいる人があるので見たら、それが三角氏  
で十勝への登山行に、冬山に登る用意に大童の態。それが出発間際の慌て様で一寸前ま  
では至極のんびりとした準備をして居て、他人の気をもませる位だったんだから、何と  
も変化の多い準備に驚きました。

漸く時間が来て、自信たっぷりに出て行ってから、ふと見たら、彼の生命とも云ふべき  
弁当が置いてありました。

今日の分を書く人が後につかえて居るので泡を食ってこゝで終わります。（相馬）

十二月十一日（土） 晴時々小曇り

舎は初冬の寒さに珍らしく恵まれた暖みを含んだ太陽の光を浴びることができた。その  
暖さの爲、路上の雪は、歩行に困難な程融け荒れていた。この状態で四、五日も降雪が

ないと、根雪を予想されている今の積雪も大半融け消えて終ふだらう。そうならば我が舎の除雪アルバイト部隊も仕事から一時あぶれる訳。所で今日の御出勤は、こゝ数日常連の相馬さん、黒島君、本日第4日の任務を終へ、愈々本腰に入った模様。

常連以外と小生。一方、これも今ではすっかり御常連になられた河村さん、中田さん C.I.E 図書館にて夕刻遅く迄猛勉強の御様子。小生、昼間在舎せなりしも他に特記すべき変ったことなかりし模様。さて、昨夕遅くに出立した三角さんは、今朝頃予定地の中富良野に到着して、あの見事な武装に満々のファイトで、今頃はもう既に登はんに移ったことか。兄の事故なき登山(山スキーでの合宿)元氣な歸舎をのみ切に祈る。 異

状 T.O

追記 本日村上先輩が来訪されたよう。

十二月十二日(日) 曇り

相馬、折内、黒島アルバイト、他異状なし

十二月十三日(月)

配電会社は、停電会社と千九百四十八年発行の辞書には書き改めるべきだ。村上さん来舎された。福重氏も珍らしく顔を出した。

歩き方は相変わらずで一安心。此頃は全く静かになった。昼は少し淋しい位だ。あと十日もすれば殆んど消えちゃうに違いない。

月光中天にあり。非音楽的合唱、騒がしく耳を打つ。

十二月十四日(火)

ツッケルの配給あり。五時半頃、七時頃の三十分間停電に舎生一同大恐慌。停電〇(十時迄)河村、折内、中田の三氏道庁の池へスケートに行く。

十二月十五日(水)

オハギ絶えて久しき。甘〇の御入口に舎生ニコ※※、副舎長歸省

十二月十六日(木)

僅か乍ら降雪があったよう。暖たかな日射し。今日又河村氏歸省。これで現在舎生八名。

以上 中田

十二月十七日(金)

△君が山から歸る。長くもない顎を火傷して冷傷して、顎に“マスク”をかけた。

平凡

十二月十八日(土) 夕方雨

長いアルバイトの間の休養日に取った今日一日は、小生にとって実に寛いだ慰安の一日であった。どうと云ったこともない至極普通な一日の生活がこんなに自分の気持を明るく軽くさせたことは近頃一寸ない。

これから又アルバイトを続けたその後の休養日に今日の様なさゝやかな慰安を楽しみを持って期待できる。アメリカに於けるやうな総ゆる設備の整った充分楽しみを与へ得る

外的環境の中に在って職業を楽しむことは残念ながら望まれないし、本職としてアルバイトをして居るのではなくて一時的にやって居る自分には、まだ突き入ってそれを慾求する必要もない。しかし、レクリエーションが各職場に徹底して行はれればどんなに全ての点で良くなるだらうと思ふ。

しかし、内面的にも幾分職業に興味を持ち仕事を楽しくやる事が出来る様に思はれる。出来るだけそうしたいと願ひ、一日の休養による慰安を延長して、アルバイトにまで持ち込む。まだ\*\*アルバイトが楽しいといった気持ちにならないが、仕事が慣れるにつけ余裕が出来て、追はれたさし迫った感情から逃げる心のゆとりが出て来たのは確かで、仕事が旨くなったと自分自身感ずるし、相棒の黒島君もそんな意味の事を云って居られた。仕事が苦しくなったからと云って仕事を楽しめる事にはならないが、精神的に相当に明るくなる。ゲルの事はあまり云ひたくないが、汗水滴して得たのは慎重を期する故か有効に使へる様な気がする。このゲルを使って購ったものはその形ある限り思ひ出となり相だ

十二月十九日（日）

先日の書き残し少々

小母さん加減が悪くて寝られたので、中田、三角の二氏、晩のエッセンを作られたところ、三角氏の作った味噌汁は俄然好評を博し、大量にあった汁は、よくも思はれる程きれいに平らげられてしまった。製法極秘らしいので書かないが、三角氏にかゝる美味の味噌汁を作らせた殊勲の小母さんは、その故か何か知らぬが、今日は「燕若」とかなんとか云ふ芝居を見に行かれる元気振りで、晩は大変楽し相にして居られた。きっと今晚は芝居の夢を見られることせう。幸福ですな。

今日は二号、十二号室にお父さん達が三人も来られ、お父さんデーとなった。夏あたりには確かにお母さんデーがあったと思つたが、お父さんではオッパイ飲みそこねたといった所。いかにも日曜らしい日曜だったらしい。村上さんが遊びに来られて夕暮時を過して行かれた。小生は黒島氏と相変らず桑園へアルバイト。今の所、除雪人夫ではなくて線路工夫である。今日は一日中寒さが厳しく耳が痛くなった位。 相馬

十二月二十日 **Mon clean and cold wind**

実は早朝よりスケート日和りにはもってこいのコンディションなのにファン兼用の上野さんのスケートを小生が壊して終つた爲、シーズン控えて張切つて居られたファンの方々に全く心痛している次第。こゝに誌上でお詫びいたします。お許し下され。

もう十日そこ\*\*で望みもしない年を一つ取ることになる。Orそれを御希望されてる方も居られるのかな？ だが舎生御諸兄には、**Happy New Year** を楽しみにしている人が見受けられない様である。まあ“**the New Year**”の御馳走の方に期待を掛けている人が多いだらう。

今の所は○、尽きせぬ思い出を秘めたこの去り行く年の立派なけじめをつける様努めて置くことがよろしいでせうな。ものは、はじめとをはりがたいせつと云ふから――

今日のアルバイト御出勤、相馬さん、黒島君に加へて三角さん——重傷そのものゝ顔をされて苦痛の程が思ひやられますね。会計係の村瀬君、多額の石炭支出代をやっと集金を終へて御安堵の様様——many thanks——

T.O

十二月二十一日（火） 雨

昨日の寒気が打って変って今日は雨、午前中はあがっていたが午後からまた降り出す。一寸した傷でもいやなもの、薬をつけると大傷の様。日が短いので従って夜が永い。十時になれば眞夜中。舎もいよ※※二室になる。金がどこからか降ってこないかなあと思っていたら天から降って来た。でにやりにやり、でも行方は決っている。

今日は少し運動の楽しみについて一言、と言つても上野先生の如く特殊な方は後にして誰にでも出来る最も身近な健全な楽しみとして歩く事をすすめるのである。いろんな楽しみがあるだらう、そして各々支持者があるでせうが、僕は歩くといふ、みんなが殆んど立っているよりも多くの時間を費すことに気を付け楽しむ事は非常に多くの人に行ひ得る楽しみとなり得ると思ふのです。そもそも予科の現在をとってみると変つたといつても運動部は、まだ予科生の物でない。あるひは入らぬのは勝手であり、部外にも用具は相当準備されているといへるかもしれない。しかし、現在の状態では運動にて「親しむ」といふのには未だほどとほい。先づ対抗遊技用の部なんてのは前世紀の遺物だ。教官なんてのは下手なが爲に取付きにくい者達に運動の楽しみを知らせる爲のもんだ。でもそれはさうとして、今の一般人民に果して運動用具に使ふ金が充分あるかどうか。もちろん道具をあつめるに要る努力にケチをつけるつもりじゃない。

しかし、本当に楽しむ爲には、二つの方向から、一つは状態の整備、一つは事故の感覚の、それも受け入れ得るやはらかさが必要だ。そして千五百を十九分位で泳げるやつはすごい事は間違いない。だけど、そんな事をだれにでもできるか。又どんな人間にそれが可能だといふ証拠以外の何だそりゃあ。高きを求める目標として全体の向上にはなるかもしれない。一種の勢慾の発散にはなるだらう。だけど、その中にそれ自身を本当に楽しむ心がかけていたら、それは歸りにはケンクワがつきものだった野球みたいな物になるだらう。それが野球の「黄金時代」だ。〇〇※※そして人間が力がない時、貧しい時、孤独な時には、運動といふものにはむかない様にみえる。しかし人間の内在的な意欲は発現を求め、そして山などはよくその対象となる。それは人が相手でないからだ。しかしそこにも束縛がある。そして状態に束縛されて最後に残つたのが歩くといふ事だ。一番人間に可能な運動として。そして人間はあるくことによって、運動を楽しむ事を僕は信ずる。

十二月二十二日（水）

中田氏歸省して、七号室に人影なく、火の気消えてがらんとした室の破れ畳の上を近頃俄に厳しくなった冷い師走風が吹き抜けている。残つた二号、十二号の二室でしきりにストーブをつゝいては、四方八方からの隙間風に対抗する音が静まりかへつた周圍に物

淋しく響く。師走の狂躁曲に躍起となっている街の人々をよそに、此の寄宿舎は案外穏かで、唯歸省する日を心待ちに待っているといった所。残る者も歸省する者も、既に計画を立てゝしまつて、銘々の計画を行ひ或は待つ間の幾日かを此の静寂を楽しみ、“ものあはれ”を心の底に感じながら過して居られることだらう。楽しい気持ちにひたっている人もある。或はふと襲つてきた淋しさに胸うたれている人もあるかも知れぬ。ラストのベビーで頑張る人、何の感興も起らない人、正月のエッセンを頭に浮かべ、そのエッセンを悦に入つて食べている自分を想像して羨しがっている人、アルバイトで得た金の使ひ道に思案している人、来年の計画に胸躍らせる人、色々な想ひが各自の心に去来しているに違ひない。家並の屋根越しに響いて来る汽車の音が実感をもつて聞こえる此頃。年を越す感興。人生の中で最も変化多い貴重な一年。精神的、肉体的其の他あらゆる点で変化に富んだこの一年を終らんとしている感興の中にあつて、一日一日のタイムが急テンポなのに驚く。今日は小母さんがお汁粉（冬至のカボチャ汁粉）を思ひがけなくも作つて呉れ、昨日の巻き寿司に続いて豪華版を展開する。さて、明日は何でせう。夜が（映画説明ならぬ）しん※※としてふけて行く。

（相馬）

十二月二十三日（木） 晴

平凡、追記、冬らしい寒さだ。夕方草地兄来る。またしばし自己礼賛の弁しきり。会費收める。本日午前零時一分より三十五分までの間、東條等七戦犯処刑さる。一抹の哀〇〇なきにあらず。日記はもうすこし意を用いて書いてほしい。書かない人があるそうだが、舎生の日記であるから廻ってきたら必ず書かれたし。

十二月二十四日（金） 晴

やゝ寒さがゆるんだ。夕、村上兄来る。ミカンごちそうになりトランプに興ず。今日から会計を相馬氏にわたした。村瀬氏も毎日窓にチョークでいたづらを書き、歸省前のあわたゞしさうな時間に一息入れる。サンタクローズにトナカイの絵が今日の仕事

Lida

十二月二十五日（土） クリスマス

星が淡く漂っている。ラジオからは **Silent night**…と賛美歌が溶け出てくる。ストーブは煙筒掃除をしなかったのに充分燃えている。人生が **for ever** に、この様な雰囲気に包まれて居ればよいのに。イエスの愛が人々の心の中を覆へばよいのに。それには人が努力せねばならない。人々はその努力を拒否続けてきた。僕なんかその頭に違ひない。人生は夢みるものなるだらうか？それともオデコにしわをよせて考へ続けねばならぬものだらうか？

上野さん、折内君が明日歸省される。僕は今夜歸ることにした。冬休みは楽しいに違ひないけど、又、三学期のことを思ふと何ともいへぬ気持ちだ。嫌なのか嬉しいのかそちらの御推察にまかせよう。

残られる方は、屋根の雪を御忘れなく

## 村瀬

十二月二十六日（日） 曇

昨晚村瀬、そして今朝早く上野、折内先生等歸省された後の寄宿舍、閑散そのものだ。三角先生の鉄棒も此の所鳴をひそめて居る。十人近くになった時、買った釜ももう大きすぎ、小母さん第三段目のカマを物色して居た。

今日は昨日の暖さにくらべ冬を思はせる天候であった。どんよりと重々しい空、時々白い雪が降ってくる。そして絶間なく冷い風がアルバイトをする。我々のホゝに吹きつけてくる。今の所仕事が楽な方なので、その寒い事。

クリスマスを送って今度やってくるのは正月ですね。皆さんおたのしみの事でせう。

では良いお正月を迎えます様。 S. K

十二月二十七日（月） 曇

非常に温い日だった。例年ならば吹雪となる所、昨夜は雨が降って畠の土がちら※※見え出したが、さすが土の中は凍っていて僅かに上面がゆるんだ位だ。舎生はたった四人。しかも後二・三日中に二人になる。

この二人で年を越すことになるようだ。従ってこの日記も頻繁に廻ってくる。書くことは良いが書く者が同じだから同じ様な文章をつゞけて書くことになる。勢ひ変化がなくて舎の日記らしくなくなる。日記は各人各様な書方で着眼点も違へば表現も異なる。主観であっても良いし、客観であっても良い。要点の列挙でも良いし、描写も面白い。又告白でも教訓でも良いのではないだろうか。そう言ったものが混って舎の日記は、舎の特質を作る。ところでこう人数が少なくなると、そう言った点が乏しくなるのは甚だ残念だ。明日は愈々待望の餅つきだ。米をうるかし、臼、きねを借りて来た。

小母さんの計画によれば、朝四時に準備を始めて、五時前には我々は叩き起されることになっている。餅つきともなれば、朝起きも苦にならないどころか勢ひ込んで甚だ張切る。新餅の味が待ちどほしい。(相馬)

十二月二十八日（火）

日記の残り少なくなったため、今日から簡単に書くことにする。朝五時半より開始し八時前に九臼全部つき上げる。つき手は、黒島氏と小生、あいどりは小母さん、おいしいあんこもちが出来ました。あんこもちの方は多分今日中でなくなるでせう。もちつきのお蔭で今日のアルバイトはふら※※。

十二月二十九日（水）

早朝、黒島君歸省。残る者は、三角氏と小生の二人、元日あたりまで続くと云はれる暖い天候の見通しに違はず気温は例年よりぐっと低い。

十二月三十日（木）

小母さんが年取りの御馳走作りの準備にとりかゝる。さて何が出来るのでせう。午前中米の配給二斗程、小生「そり」を引いて取りに行く。今晚小生外泊

十二月三十一日（金）



さゝやかな年越し、感無量。二十代の青春に足ふみ入れた三角氏は特に想ひあまるものがあつた様だ。除夜の鐘を終りまで聞いたとのこと、小生は例年の如く早々と寝てしまった。